

〔資料〕

翻刻 隠岐高田神社所蔵『高田大明神縁起』（丹表紙本）

阿部 美香

中世を代表する古典学者であった関白二条良基（一二三〇～一三八八）の最晩年の事蹟として、高田大明神への百首和歌・千句連歌の奉納がある。それは、至徳年間（一二三四～八七）に隠岐の島後都万の地に突如出現して祀られた明神の発句を受けて、京都四条道場金蓮寺五代浄阿上人が営んだ勧進興行に応じたものであるが、その歴史を今日に伝える貴重な遺品が、高田神社蔵『百首和歌』（県指定文化財）と、二種の『高田大明神縁起』である。

このうち『高田大明神縁起』は、高田山における明神の出現から、真言寺院である千光寺と時衆道場の両者の関与のもとで発展する明神の祭儀を説き示した縁起であり記録である。表紙の色から紺表紙本、丹表紙本と呼びならわされる二種の縁起は、ともに南北朝時代に成立し、神仏一体の明神の出世について共通する縁起を語りながらも、それぞれに異なる特色をもって成り立っている。例えば、紺表紙本は百首和歌・千句連歌の奉納という勝事を尊び、文芸の地としての発展を支えた時衆の役割に重きを置いて編まれた縁起であるのに対し、丹表紙本は時衆を諸宗の一つに位置づけ、それを含む浄土教の所説を豊かに展開させながら、明神の神格を明らかにする。また紺表紙本が成立した当時の姿を原装のまま伝えるテキストであるのに対し、丹表紙本は慶長四年（一五九九）に来島した浄土僧信譽によって書写され、元和元年（一六一五）に奉納されたもので、明神祭祀の始まりと復興という、二度の画期を背景に成り立つものである。いずれ

も百首和歌とともに、関西大学島根大学共同隠岐調査会によって『隠岐』（昭和四三年）に紹介収録されている^①。その成果に導かれあらためて調査を行った結果、高田神社の古文書箱から、これまで不明とされていた紺表紙本の奥書一紙を発見することができた。また丹表紙本には、縁起の成立や神道思想と関わる重要な口伝が注や裏書に残されていることも明らかにあった。それらの情報は『隠岐』では全て省略されている。そこで、紺表紙本の奥書を紹介するとともに、丹表紙本については注記や裏書を含めた全文を翻刻紹介し、中央と地方を結んで成し遂げられた聖地の文化創造と、その宗教空間に関する総合的研究の一助としたい。

はじめに、紺表紙本の奥書について、その本文を掲げ紹介しよう。

大光寺三代重阿、彼奉遇御出世之時節、

□□奉済度利物、神□事、併非令就

本地無作正説耶。是偏依宿縁之^②深厚。

然者、則、不顧以下不相応之儀、不憚後見露、

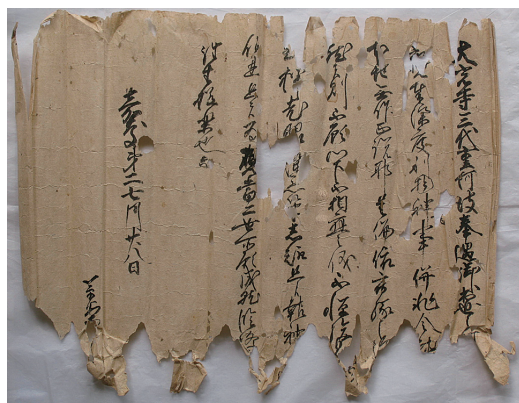
老眼□□筆志趣、且者報神□□

仏恩、且者為現当二世、所願成就、臨終正念、

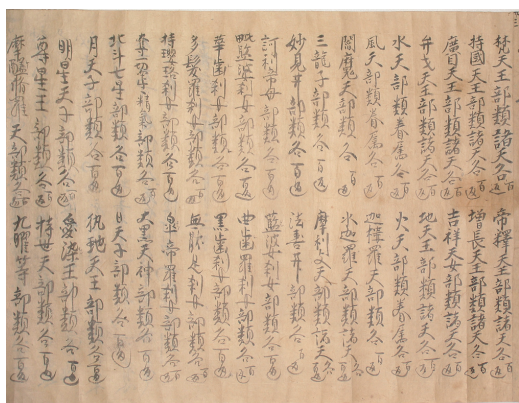
往生極樂也矣。

嘉慶第二七月廿八日、

草案之。



紺表紙本奥書



丹表紙本 信譽自筆の神名帳

紺表紙本と同じ料紙に本文と同じ筆跡で記された右の奥書³⁾によれば、紺表紙本は、嘉慶二年（一三八）に大光寺重阿によって草案された縁起であった。大光寺とは、西郷の近郊にある有木に所在した時衆寺院（四条派の末寺）で、大光明寺とも呼ばれ、京都の四条道場金蓮寺第四代浄阿上人を輩出した寺院である。⁴⁾前述した百首和歌と千句連歌の法楽は、その後を継いだ五代浄阿上人の興行になるもので、三代重阿の歌も入首している。つまり、紺表紙本は、隠岐と都を結んで明神の祭儀を支え、百首和歌・千句連歌の法楽に深く関与した人物の手により編まれていたのである。本文には、訂正のために施された切り継ぎの痕等も見える。縁起の編纂という営みを当時のままに伝え残す紺表紙本は、文芸と一体となった中世の宗教運動を読み解くうえで貴重な資料といえよう。

これに対して、今回翻刻を行う信譽の奉納した丹表紙本は、奥書から、もとは千光寺の頼尊（真言僧）と其阿弥陀仏（時衆）によって記され奉納された縁起と知られる。そこには、嘉慶二年二月三日と記されている。

この二月三日という日付に着目した

い。なぜなら、その日は毘沙門講が営まれる日だからである。その創始は、紺表紙本と丹表紙本のそれぞれに、融通念仏の縁起を用いて説かれている。そこには、鞍馬毘沙門天の前で諸天神祇並びに冥衆が一同に念仏結縁を誓った証である神名帳の全文も引かれる。それを、信譽は自ら筆を執って書写していた。しかも、その紙背には神道に関わる頼尊の口伝まで書き付けている。これらの姿勢からは、神名帳と、それに象徴される毘沙門講の重要性がうかがえる。それが明神の祭儀のなかで果たした役割と、縁起奉納の日付の持つ宗教的な意味は、連動するものと考えられる。

信譽が施した注や裏書は、縁起本文と密接に関わり、明神の祭儀を探究するうえで必須の情報が含まれている。それらを合わせて読み解くことで、はじめて縁起のもつ思想的な意義も理解することができる。丹表紙本は、紺表紙本の成立意義を異なる位相から照らし出し、明神の祭儀を明らかにすると共に、神祇と一体であった中世の浄土教の活動を豊かに証言する、貴重なテクストなのである。

注

- (1) 吉永登・神堀忍「高田大明神縁起について―付・縁起（二種）翻刻―」（関西大学島根大学共同隠岐調査会編『隠岐』、毎日新聞社、一九六八）。
 - (2) 阿部「巫女と仏教―高田大明神縁起―における花の乳母をめぐる」（『国文学 解釈と鑑賞』六九巻六号、二〇〇四）、「高田大明神縁起」の故地を訪ねて」（『昭和女子大学女性文化研究所紀要』三二号、二〇〇五）。
 - (3) 紺表紙本、丹表紙本の書誌については、後者を参照いただきたい。
 - (4) 奥書一紙の法量は、縦三〇・〇糎、横四四・〇糎である。紺表紙本は、修復によって天地辺が切りそろえられたため、現状では上巻が縦二九・六糎、下巻が縦二九・一糎となっている。
- 四代浄阿上人も大光寺住山の頃、「重阿」を称していた。河野憲善「隠岐大光明寺を探る記」（『時衆研究』四号、一九六三）参照。

翻刻凡例

- 一、旧字や異体字は通行の字に改め、読解の便を図り私に句読点を示した。
- 二、当て字や誤字はそのまま表記し、右傍に括弧でママと記すか、正しい文字を示した。
- 三、返点の表記はその位置を含め、底本の形を伝えるように努めた。
- 四、音読と訓読の別を示す連読点は、底本に従ってこれを残した。但し、単独のものは省略した。
- 五、補入、見消、抹消の指示があるものはそれに従い、訂正後の本文を掲げた。補入した文字は右傍に・を付して、その別を示した。
- 六、虫損により不明な文字は、該当する字数分を□で示した。また、難読の箇所は*で示し、右傍に推定される文字を(カ)として記した。
- 七、行取りは底本に随い、紙継毎に紙数を「で示した。
- 八、頭注は版面の都合により、それが掲げられている本文の下に表記した。
- 九、裏書のある箇所は、本文の下にその位置情報を線で示し、末尾にまとめて記した。
- 十、そのほか注記すべきことは、校訂注において示した。

◎翻刻 丹表紙本『高田大明神縁起』(信誉書写本)

高田大明神縁起上

「(外題)

礼文云

高田密厳亦安養 成沢神仏一池水
蓮華即是法身体 華開見仏弥陀願

高田大明神縁起上

夫以、神明元旨陰陽基、舍那本誓

胎金起。是故、乾坤二氣、両部外用

也。定恵合智、天地内証也。然間、

尊神^{胎内男女}下^{胎内男女}外^{胎内男女}宮、以日域鎮護、示^二

金界胎界^一。正^二月宮殿開心城、本

位聖衆則神明所属眷神^矣。爰

以、古^エ天地未開、陰陽未分時、鶏子^{ケイ}

のことなる一物あり。その清すめる

はのほり天となり、重濁れるは

下地となる。然は、天先成、地後に

さたまれり。国土浮^{キタハユエ}漂れること、

遊魚の水浮かことし。即、神成。所

謂、第一、国常立尊^{トコミコト}。第二、国狭槌^{サツチ}

尊。第三、豊斟淳尊^{トヨクニスノ}。第四、泥土^{ウビチ}

瓊尊^ニ、沙土瓊尊^{スヒ}。第五、大戸^{オホ}

道尊^チ、大戸間辺尊^{モタルノ}。第六、面足^{オモソク}

尊^{カシコネノ}、惶根尊^{カシコネノ}。第七、伊弉諾尊^{イサノ}

伊弉冉尊^{イサハニ}。はしめの五は五行

の精にて、その形未^レ顕。面足より人

の形をそなへ給なり。第七の尊

の御時、稻負鳥^{イナライ}の教によりて、初て

共^{ミトノマツ}、為^ナ夫婦し給へり。仍^ナ、一女三男産給ふ。所謂^{ウミ}、日神、月神、蛭、素盞^{サノヲ}、是也。この前に、伊弉諾尊、下界地を卜^{シモツク}為^ナ、二神天浮橋上^{ヘシ}

にして、議^{コトアケシテ}曰^{イハ}。豈^{ナラニ}、此下に国無らんとて、則^{アマノサカホコ}、天倒鉾^{アヲ}を指下探給ふに、

但^{アラ}、青海原^{ウチ}耳なり。鉾^{シタ、レ}滴^{シマ}一^ニ島と成。淡路^ア島、是^{コト}也。その後、磐^{イハ}烈根^{サケネ}烈^{サケ}の御子武^{タケミカツ}遲^{ノミコト}命^{ミコト}、出^{イデ}雲^{クモ}国^{クニ}来^キ下^{シタ}、西国邪^セ

魔^マ、悉^{スベテ}降^{クダリ}伏^{フス}。又^{マタ}、東^{ヒガシ}夷^イ邪^セ魔^マを防^{サマヘ}為^ナに、常^{トコ}州^{カシマ}鹿^カ島^{シマ}下^{シタ}給^{タマフ}。邪神^{セシノ}対^{タイ}治^チ

して、魔^マ国^{クニ}神^{カミ}国^{クニ}と成給へり。然後^{ノチ}、天^{アメノ}照^ス太^タ神^{カミ}を国^{クニ}の主^{ヌシ}と成給へり云^{イハレ}。

抑^{オモヒ}当^{マカ}社^{ヤシロ}大^{オホ}明^{ミナト}神^{カミ}は、天^{アメノ}神^{カミ}七^{ナナ}代^{ヨリ}の最^{モト}初^{ハジメ}、国常立尊^{クニトコタエノミコト}にて御座^{ミマス}。然^{シカレバ}、為^ナ

衆^{タタ}生^{ナマ}利益^{リキ}、去^{サレ}地^チ神^{カミ}五^{イヒ}代^{ヨリ}終^{ハシメ}、鷗^ウ鷗^ウ草^{クサ}不^フ葺^{フキ}合^{アヒ}末^{マツ}方^{カタ}、^{八十三万五千七百四十年}

切^{ウカヤフ}利^キ天^{アメノ}下^{シタ}、当^{マカ}国^{クニ}当^{マカ}山^{ヤマ}を栖^{スミカ}とし給事^{シタマフ}、七^{ナナ}千^チ余^{ヨリ}年^{トシ}を經^ス給^{タマフ}ふといへとも、

人^{ヒト}是^{コト}を不^フ知^{シラ}處^{トコロ}へし。至^{イデ}德^{トク}武^{タケ}年^{トシ}春^{ハル}

比^ヒ、石^{イシ}見^ミかたより賊^{ソク}船^{フネ}数^{スウ}百^{ヒャク}艘^{フナト}、此^{コノ}国^{クニ}

指^{サシ}のほりけるか、当^{マカ}国^{クニ}ははなれ島

なるにより、まづはしめに打^ウ取^{トル}くわ

たてゝきたる由^ユを聞^{キコ}及^{ツキ}しかは、津^ツ途^ツ、燈^{タク}木^ギ、

都^{ミヤコ}万^{マン}三^{サン}ヶ^ケ処^{トコロ}人^{ヒト}民^{タタ}、高^{タカ}田^タ山^{ヤマ}城^{シロ}郭^{カク}して、財^{サイ}宝^{ホウ}、所^{トコロ}

従^{ツグ}、眷^{ケン}属^{ゾク}ともに取^{トル}のほりふみけかすにより、明^{アカリ}

神^{カミ}、そのとき成^{ナリ}沢^{サハ}池^チ立^{タチ}出^デ給^{タマフ}、十^{ジュ}六^{ロク}所^{トコロ}大^{オホ}明^{ミナト}神^{カミ}宿^{ヤス}仮^カ

たまへるなり。この池^チ山^{ヤマ}頂^{タカ}あり。一^{イチ}間^マ四^シ方^{ホウ}池^チなり。こ

「二紙

の池^チ、さまぐのことわりあり。くわしくは、しもにこれあり云^{イハレ}。さるほどに、彼^{カノ}賊^{ソク}船^{フネ}ともづなをきりてこのくに、おしわたさんとするときに、明^{アカリ}神^{カミ}、十六^{ジュウロク}所^{トコロ}これ^{コノ}を御^ミらんじて、氏^{ウヂ}子^コをあはれみ給て、かふらや一つがひはなし給へは、かれらがために悪^{アク}風^{フウ}となり、数^{スウ}百^{ヒャク}艘^{フナト}賊^{ソク}船^{フネ}、大^{オホ}形^{カタ}破^ヤ却^セし、残^{ノコ}舟^{フネ}は石^{イシ}見^ミ方^{カタ}をさして立^{タチ}帰^キたりときこゑけり。此

事^{コト}は、のちに明^{アカリ}神^{カミ}御^ミ出^デ現^{ゲン}のとき、御^ミ託^{タク}宣^{セン}によりてあらわれたりと云^{イハレ}。其^{ソノ}後^{ノチ}、明^{アカリ}神^{カミ}の御^ミ出^デ世^セの

縁^縁起^キは、当^{マカ}所^{トコロ}地^チ頭^{ヅモ}左^サ々^々木^キ治^チ郎^{ロウ}左^サ衛^ヱ門^{モン}尉^ヱ広^{ヒロ}有^ユ公^{コウ}後^ゴ室^{シツ}、病^{ヤミ}痾^カ時^{トキ}々^々おこり、その身^ミたやすからず。これに

よりて、いろ／＼療^{リョウ}治^チすといへども、ついにきら／＼しき験^{ケン}もなし。病^{ヤミ}性^{セイ}つねにあひかわり、そのすかたつねよりけたかく、人^{ヒト}をにらまへ、物^{モノ}もの

たまはず、ふしきの病^{ヤミ}なりと、人^{ヒト}みなこれをあやしまざるはなかりけり。こゝに、当^{マカ}国^{クニ}都^{ミヤコ}万^{マン}院^{イン}内^{ナイ}、千^チ光^{コウ}寺^ジ

頼^{タノ}尊^{ソノ}法^{ホウ}印^{イン}、智^チ行^{コウ}兼^{ケン}備^ビ聞^{ブン}あるにより、彼^{カノ}法^{ホウ}印^{イン}、請^{コト}

入^{イル}けれは、弟^{ケイ}子^シあまた召^{メカ}具^グして、急^{イサ}き彼^{カノ}亭^{テイ}に

来^キ臨^{リン}し、手^テに印^{イン}を結^{ムス}、心^{ココロ}に觀^{カン}念^{ネン}をこらし、口^{クチ}に真^{マコト}

言^{コト}誦^{ジュ}し、異^イ口^コ同^{ドウ}音^{オン}に祈^{イノ}、加^カ持^ヂ奉^{ホウ}と云^{イハレ}とも、一^{イチ}日^{ニチ}一^{イチ}夜^ヤ

は更^{スガ}其^{ソノ}しるしなし。曉^{アカリ}方^{カタ}にいたりて、彼^{カノ}病^{ヤミ}者^{モノ}、両^{リョウ}

眼^メみひらき、行^{ユク}者^{モノ}をはたとにらまへて、暫^{シバ}有^{アル}りて、老^{ロウ}僧^{ソウ}に、我^ガ加^カ持^ヂせらるへき身^ミにあらず。そこをま

かりたてとて、追^ツ立^{タチ}られければ、恐^{オソ}おのゝき、座^ザ中^{チュウ}皆^{みな}々^々立^{タチ}退^{タイ}く中^{チュウ}にも、頼^{タノ}尊^{ソノ}、又^{マタ}立^{タチ}帰^キり、五^{イヒ}大^{オホ}尊^{ソノ}の呪^{ヌル}をもて加^カ持^ヂし、殊^{サカシ}には中^{チュウ}王^{オウ}不^フ動^{ドウ}明^{メイ}王^{オウ}の慈^ジ救^{キウ}火^カ界^{カイ}の呪^{ヌル}にて、良^{ヨシ}久^{キウ}祈^{イノ}申^{マウ}ければ、其^{ソノ}時^{トキ}、すこし

気^キ色^{シキ}やわらき給^{タマフ}。様^{サマ}々^々の託^{タク}宣^{セン}とももの有^{アル}けるとかや。

「六紙

【頭注1】
後醍醐天皇御宇、建武元年八月十七日、内侍怪而射タル也。太
□□經十卷有。

我山の梅檀の林をきりはらひ、ふみけがし申

せしこと、誠に無念に思食^スとて、子歳^一、午歳^三の両

人の魂を取て、先、右の手ににきりて持たり。忽

に命をもめさるへけれども、しらせすしては、迷の

凡夫、うたかひをなすへきにて、其しるしを

見する也とて、両手をつよくにきらせ給たるに、

手くびより指のさきにいたるまで、色かはりくろ

みて、さらによのつねならず。御気色は、申も中

くおろかなり。身の毛よたちて、群集の人々恐

おのゝきける中に、大般若をよみ、神馬を遣す

へきよし、子歳^一、午歳^三、同心に申由申たりければ、

左様の沙汰をいたし申ならは、さこそきこしめされ

め。但、大明神、猿^申の時に御あかり有へし。其以前に

いつれもまた申さすは、かなふへからすと仰あり

ければ、則、神馬を引立、大般若のひほをととき、

転読の声をあげたりければ、其時、さらは

両人か魂^{タマシイ}を帰へきなりとて、先、左の御手を開

かしめ給。御馬ちかくひかせよ、老僧、代官^{タウツ}に乗馬

すへきよし、仰有ければ、頼尊^{タカ}、則乗し、二三度

うちまはしおりければ、今は此神馬共、一疋は八幡

へ進へし。此所に出世したる礼なり。一疋は十六社へ

まいらすへし。此程、我山を出て、やとかりたる

礼なり。一疋は、頼尊^{タカ}給はるへし。御意のことく、

皆々引遣けり。十六社へは、神人御馬を引て、御

殿を三度引めくりけるに、宝殿余に震

動しければ、社人御馬をすて、驚去ぬ。つな

がざるに、此馬、一日一夜、社前に立てはたらかず。其後、

宜^キ祢とも、不断召仕へきしるしに、色ある衣^イ

「七紙

裳^{シヤウ}、一つ、兩人にとらすへし。午歳沙汰をいた

すへしと仰有ければ、いそき小袖まいらせけ

れは、則、神子^{ミコ}二人給ぬ。かくて、御宝殿を立、高

田大明神と祝奉^{イタ}り、深く渴仰^{カツゴウ}申へき事おし

ゑ有て、あからせ給けり。昔、天竺^{テンシク}にして、龍樹菩薩、

鉄塔開しかは、金胎^{キンタイ}の如来、両部諸尊、五百余尊、七

百余尊、各其尊容をあらはし、真言無上の法

を伝。則、印明を彼薩埵に与給。薩埵、又、龍猛菩薩に授給

しより以来、一器の水を一器にうつすか如して、

三国伝来密教、かへる事なし。今、老僧頼尊、高

田大明神御出世に相奉り、祈加持申にて、御口開

有て、出世の本懷を顕れ給故に、薄地凡夫、立所に三業

清浄の信心を発こそ、ふしきなれ。彼は南天上代仏教、

即身即仏の密法、是は東隅^{トウグ}末世の神威、和光利物

方便、事異なりと云とも、本地遺法、審なるにて、

今垂跡の靈威を顕照し給事は、内証の一味、こゝに明

けし。誠に忝侍れ。さる程に、則、彼山のふもとに、玉の

御宝殿をみかき立、本地両部呪^フ字を札に書奉り、高

田大明神と申て、敬信を至さすと云ものなし。

かくて、其とし暮ぬ。至徳三年の春秋すぎ、十月

十五日^{アカツキ}、曉、花の乳母、道場にして良久所勞ありぬる

ことあり。目もあやなり。暫ありて、天若宮と名のり

をはしまして、始て顕れ給、御託宣あり。我、神通の

法を此花乳母に授。わさと阿弥陀仏の御^ミこたらいにて

わたす。此法を授るうへは、いかにじたいするとも、叶へから

す。しほのこり一度、水のこり一度、一日二度つゝこりを

かきて、大明神の御前七日参籠申へし。此教背^マ

我うらみ給な、と神託有ければ、ちからなく、こりをかき

裏書②

「九紙

たまふ。七日さんらう申されけるとかや。其後、程へすして、又、御託宣あり。唯、尋常の祝神などの様に思ひなして、宝殿かたのごとく作ておしこめて、宮渡申事もなく、我を封入たる老僧もふしきなり。宮渡なきにて、花の乳母、か様になやみたり。又、別の勞あらず。今のことくならは、午才ふしきなり。これより、未申の方飛給へし。其時、花の乳母をも召具すへきなり。其義ならは、此所荒野なるへき也。子才、殊不信心なり。兩人共に、我を恨申事あるへからすと、以外に御とかめありければ、さま／＼におこたりを申。御宮渡あるへきならは、そさうにはあるへからず。先、内外鳥居を立て、内鳥居きは門屋をたて、門客を祝申へし。門客、伐明丞、小將、兩人をいわうへし。伐明丞申は、大明神、切利天より此山に天下らせ給時、御前につかわれけるに、彼山、昔は深山にてありしを切あけ、御座を定め申たりしにて、伐明丞とはめさるゝなり。御宮渡の時も、御さきをうつへきなり。是はと思はん名馬を神馬にまいらせ、二の鳥居、門客共に、午才沙汰し申へし。大明神御恩を蒙たるものなり。異儀を申へきかと仰有ければ、則、領掌申けり。さらは、先、外の鳥居を立、後に内鳥居を立へし。御宮渡、次第、一番神馬を引、其次き神子共、其後に御輿、御跡老僧。いづれも、内鳥居きはにて馬よりおりて、かちに御供申へし。御宝殿三度めぐて後、御神体を入奉るへしと仰有けるに、御輿ながら御殿に入まいらせて、御座あるへく候やらんと申たりければ、不可然、余の神達などの様に、奥ふかくは有るへからず。あらわれて、いかにも四方衆生、拝まるへきなり。御託宣ねんころ也。

二十紙

一見大日尊、現世大安隱、消滅無量罪、後生花藏界、文証、此に現前なる者歟。其後、又、定日を御尋有けるに、十一月十四日、五日、それも天氣よて十七日、八日へ申へきよし申ければ、天氣の障、聊あるへからず。別して、日をとる事も不可有。月の中には、十五日を賞する日なり。只十五日に治定し申へし。先、十四日の夜、地鎮をして地神を祭申へし。いかなる仏と申も、地神の恩を報するなり。国土草木までも、地の恩をはなれず。然は、衆生、殊、土神を貴敬申へし。御をしへねんころなり。さるほとに、午才、先、二の鳥居をたて、御輿を新造し奉り、御宮渡をいとなみ申けり。既、霜月十四日夜、地神祭り、明る十五日に成ければ、昨日まではおひたゝしき大雨にてありしか、其日至て、殊に青天に成、午時計に御宮渡ありけるとかや。御神託のごとく、一番に神馬を引。此馬は子の才秘藏して、両三年か間、一ノ厩に立られたりける馬也。おかみあくまでたりて、肢爪かたく、三長三短のよそおひ、竜の馬はちす。是は、きりあけ丞、大明神の眷属の神達、八万四千の其中に、一の大員にて、御代につき申たるにて、官途、関白殿となし申され、此馬を給を以て、御さきたちありけるとかや。其次に、八人ノ神子、ちわやの袖をかざし、五人の神楽男、伎楽を奏す。其後、御輿、御跡に老僧をはじめて、衆僧列歩し、讃をし、唄を引、散花対陽す。役人鉢をつき、鏡をならし、御宝殿をめぐる事三匝して、御神体を入奉りけるに、國中貴賤、結縁の為に群集したりけるに、彼御儀式の殊勝なりけるを拝、神慮御感応も押計られて、万人渴仰、一心に帰す。其

二十一紙

後、十^{ツガイ}番の矢をこめ、上馬、射馬、種々渡物すきて、車を作、山を引^ス。見物結縁、両輪^{リョリン}の得益、親なる者哉。色々はやし物、耳目を驚。晩に及、衆徒、猿樂延年の芸を尽す。終日の見聞、職而神威をかゝやかさずといふ事なし。凡、大明神御出世、洛中にひろまり、御威光、忽に天下普き事は、併、上人の渴仰を始とし、准後の敬信に有。依て、歌道事、古今の神態とし給へる事、諸社其証、当社御感応、同已にみえたり。かくて、同き十二日の暁、時衆の夢想到、昔にもけふさく花のまさり草。是即、大明神御発句のよし、関白殿御託宣にあり。昔は、天神七代の第一として、神道を開白、治天何千万歳にや。今は、高田大明神と再来有て、七千歳を経、末法末世に出現し給、衆生を済度し給ふ。御威光、忽に日域に普天し、万人の信仰、ますく日に随て盛なるものおや。其心、彼発句に明らけし。目出とも愚なり。まさり草入事、菊を賞したる名なり。草合の時、付られけりと、八雲にみえたり。されは、千草万種の中に、此花ひとり、不死の良薬として、仙家に殊用^シ之とかや。重陽の宴と云。併かの花の故なるとや。神慮、偏に一切衆生、無病延命の祈誓をかならんとなり。即、彼御発句、風聞有しかは、源氏の深信仰を至給。□^{移カ}造亭に
おいて、伯州、隱州両国代官、其外、数寄作人召集、法楽を興行。重、神余^シ之相副寄進状、同懷紙等、翌日に当社へ渡進られけり。随而、当国造宮料等、同進られき。其後には、自国他国、弥、彼御発句をもて、法楽連歌数をしらすと^云。

「十二紙

さる程に、御宝殿造替奉る事は、又、午歳願主たり。其故は、彼敵孫^{テキソ}に戌歳なりけるか、財芸^{サイゲイ}も人並なかりければ、祖父殊に是を鐘愛給とす。然とも、短命^{ミダシ}の想あるによつて早世すへきよし、年月日限。さても、連々に御託宣有ければ、午歳祖父、是をかなしみ、祈禱の為に新造し奉り、六月の八日より事はしめ、八月十八日御柱立^{トウクラ}、九月十八日御棟上有。されは、御宝殿結講^{ケツコウ}、誠精をいたす。金をのへ、玉を瑩^{ミツカキ}、御拝殿は十方檀那として、七月八日事始、八月十七日御柱立、九月廿四日御棟上、同廿八日御遷宮あり。其儀式、去年御宮渡に聊もかはる事有へからす。但、又、御輿を新造奉り、御神体を入奉り、花の乳母、をなし御こしに乘て遷宮^{ゴウ}あるへし。神御輿に凡夫を聞召^{キコシ}乗すへき事、衆生不審をいたすへし。されは、是にてしるへし。花の乳母を普通の凡夫と思へからす。其為に、かり殿へ御出の時も、同く御宝殿に座なからかき申せ、と御託宣ありしは是なり。此うへは、聊も辞退^{シリキ}申へからす。兩度御託宣ありければ、神慮に任て、花のめのも大明神の同輿にまいりて、御遷宮なり給。有難とも、かへておろか也。先立御神託の時、此花乳母一門、末代まで当社管領として、宮中を出入し、神供を備奉るへし。其外、祢宜、神主なとて、別而、ゆめく有へからす。他家より又、いかに望申とも不叶。是段、縁起にしるし置へき由、御託宣有。此時思合られ侍り。凡、議式、御宮渡に、同関白殿、御馬にて御前打、小^コ将殿、同乗馬にて後陣^{ゴジン}を打せ給。千光寺の僧、蓮花会を取行、舞楽を奏^{ソウ}、舞章伶人、芝田楽等、其外

「十三紙

種々見物、終日其芸を尽す。国中の貴賤道

俗、結縁見聞するに、耳目を驚し、心肝に染、神慮の納受も、職而おしはかられて、目出こそ侍れ。

かくて、其夜、子歳信仰の余に、臨時踊を敷行せられけるに、花の乳母に託し、御殿の内より

御吏を以て、今夜の踊、殊勝に思食。但、早々結願不足なり。然とも、今夜にかきるへからすと神慮趣、仰進せ給。誠忝思奉り、何度も神慮に

任すへき由、御返事申されけり。さる程に、拾月三日の夜、花の乳母、道場にして御託宣の時、先、臨時の

踊、神慮に相叶、殊勝の由、重々仰有。高声踊躍の夜、神慮に相叶、殊勝の由、重々仰有。高声踊躍

称名念仏、功德甚深微妙。故、経云。仏語弥勒、其有得聞、彼仏名号、歡喜踊躍、乃至一念。当知此人、為得

大利。即是具足、無上功德。是故弥勒、設有大火、充滿三千大千世界、

要當過此。聞是經法、歡喜信樂、受持誦誦、如說修行。光明大師放

光讚云。其有得聞彼、弥陀仏名号、歡喜至一念、皆當得生彼。謹

開一解仏祖両話、高声念仏功德判云。仏道万差ノ風ノ音ハ、鳴レ修行多

門ノ梢、所詮理一ノ波ノ音ハ、響ク得果不二渚。松ノ風独一颯々、覺一

專明々。是則、十方浄土、雖無勝劣、以二西方一定ニ往生浄土ノ境、諸仏ノ

慈悲、雖レモ、為二平等、以二弥陀一號ニ衆生濟度主シト。然則、名ニ有ニ招物ノ功。不レハ呼

「十四紙

名、何ニ物カ施ニ其ノ徳ヲ乎。物ニ有ニ応名ノ徳。不レ施徳、誰人呼ニ其ノ名ヲ耶。去レハ者、響ニ応レ声ニ則、声成ニ仏事ニ云フ、是レ也。以レ之ヲ、弥陀善逝、應ニ称名声ニ、鎮ニ運ニ来迎引接ノ駕ヲ。我等衆生ハ、乗ニ如來願力ノ船ニ、常到ニ楽邦ノ岸ニ。所以、諸行無常ノ夕々ニハ、上求菩提ノ響ニ念仏ノ声ニ高ク晴レ、嘯ニ妙覺朗然ノ月ニ、撥ニ無明長夜ノ眠ニ。是生滅法ノ朝々ニハ、下化衆生称名

【頭注2】
設置
拜四八
拔提
生者
沙羅
會者
祇園

「十五紙

唱ヘ深歎、詠ニ入重玄門花ヲ、覺ニ生死輪回ノ夢ヲ。所憑弥陀本願、所期極樂九品。念仏ニ雖レ无ニ淺深、高声ニ唱、功德弥広大也。名号ニ不レ有ニ偏頗、音声明ナレハ、利益尚平等也。依茲、業報差別經ノ中ニ、挙ニ高声念仏十徳ヲ。第一、明ニ覺眠ニ徳者、高声念仏ハ覺ニ妄想ノ睡ヲ、一心清淨ニ无ニ惡覺夢ニ。第二、明下怖ニ魔障ノ徳者、八万四千邪神、驚ニ念仏声ニ、退ニ散他方ニ。三障四魔ノ鬼類、怖ニ称名唱、不レ来ニ門内ニ。第三、明下念仏声廻ニ十方ニ徳者、仏光ハ既ニ依レ照ニ法界衆生ニ、念仏ノ声隨、廻響ニ衆生六門ニ十方世界ニ。第四、明下息ニ之ニ塗苦ニ徳者、依ニ貪瞋癡罪、雖レ受ニ三途苦ヲ、酬ニ一声十声称名ニ、滅八十億劫罪障ニ。第五、外声不交徳者、称名外不レ求ニ虚言ヲ、念仏外不レ見ニ余法ヲ、恬言不レ遮耳ニ、醜姿不レ謁面ニ。第六、明ニ心不散乱徳者、偏住称名念仏声ニ、自弘ニ散乱鹿動

「十六紙

念^一、念仏弥以殊勝。第七、勇猛精進者、
念仏勇猛力最大^{シテ}滅^二罪業^一、如^レ研^{ケン}破盤^{バン}
石^一。第八、諸仏歡喜德^ト者、諸仏出世本
懷、為^レ讚^二弥陀名号^一、弥陀悲願為^レ救衆
生苦患^一。故、觀^二一遍称名唱^一、含^二諸仏歡
喜笑^一。第九、三昧現前德^ト者、三昧^ト者、調
直定。我等衆生心^ハ、雖如^二蛇身一曲^一、依念
仏声^一直^ニ、無^レ迷^{コト}淨土^ノ道^ニ。第十、明往生淨
土德^ト者、運^二一期称名功^一、預^二臨終正念^一
祐^ニ。往因罪業速^ニ消滅^一、无始宿善忽薰
發。仏神三宝含^二歡喜笑^一、鬼魔波旬閉^{コト}ハ
逆惡扉^一、高声不退^ノ称名^ニ无^レ過^{コト}也。法性
真如^ノ鐘^ノ声^ハ、覺^二生死長夜眠^一、決定往生^ノ
月光^ハ、照^二極樂不退^ノ台^一。聽聞巨^ニ諸人^ニ無^レ
不^レ發^心。利益通^ニ自他^ニ無^レ不^レ隨喜^一。善人^ハ
喜鐘^ト伴^ニ念仏助音^ノ唱^一、凡愚^ハ勇^レ響^ニ運^二通
力^一至誠^ノ志^一。為^二十方諸神^一、俗諦守護備^{ヘリ}
法樂^一、為^二三世諸仏^一、說法開道^ノ顯^シ化儀^一、衆
魔聞遮^ニ利釵^一耳^ニ退散^一。無^レ競^{ウヤモウ}怨敵^ハ、拭^テ称歎^ノ
淚^一、還成^二歸伏^一思^一。嗔恚強盛^ノ族^モ、新^ニ勵^{マシ}柔輓^一
慈悲心^一、愚癡無慙^ノ輩^ヲハ、終開^ニ知恵滿德^一
娛^ニ、設^ニ出離生死^一糧^一。養^ニ六親眷属^一、務^ニ報
恩謝德^一費^一、育^ニ七世父母^一、遠^ニ通^ニ地獄^一則^ニ報
罪人哀^一哭息^ニ寒熱^ノ苦^一、獄卒強^ケ抛^キ呵責^ノ棒^一。
近^ニ韻^一畜趣^ニ則^ニ江河鱗^一振^ル結縁^ノ、山野^ノ
獸聳^ニ下種^一耳^一。仍、鐘^ノ功德、大旨如^レ斯。念
仏功德、無^レ勝^ニ、高声^一。称名^ノ利益、無^レ增^ニ鐘
鳴^一。自^レ非^ニ三尊^一引接^ニ、不可救^ニ三業不善^一、

「十七紙

我等^ヲハ。不^レ唱^ニ六字^ノ名号^一、不可救^ニ六根放逸^一
衆生^一。口^ニ依^レ唱^ニ名号^一、離^ニ妄語等^ノ四^ノ罪^一、手^ニ
依^レ擊^ニ鉢^一鐘^一、遁^ニ殺盜淫^ノ三^ノ業^一。意^ニ依^レ念^ニ彌
陀^一、却^ニ貪^一、貪^ニ嗔^一癡^一、身^ニ三口四意三^ノ十
惡無^レ犯^ニ之^一。馮^キ哉、依身口相応^ノ念仏^ニ、忽
離^ニ十惡不善罪業^一。貴^キ哉、任^ニ三業至誠^一
称名^一、速^ニ持^ニ十善清淨^ノ妙果^一。不^レ念^ニ念仏^一、三
業即^ニ誤^一、西方^ハ隔^ニ二十萬億土^一霞^一、遙^ニ遠^一。唱^ニ
名号^一、十善忽^ニ持^一、極樂^ハ在^ニ八道娑婆^一、
此近^シ。雖^レ生^ニ濁乱^ノ末世^一、強^ニ不^レ可^レ歎^一。以^レ唱^ニ
弥陀名号^一、偏^ニ可^レ為^ニ足^一。難^レ受^ニ人身^一、難^レ值^ニ
念仏^一。既^ニ難^レ受^ニ人身^一、宿善可^レ喜。現世
安穩、是也。亦、易行^ノ々^ニ称名^一、來生有^レ憑。
後生善處、是也。懿哉、阿弥陀^ハ諸仏^ノ惣
名、六字^ハ是、万法通称^{ナリ}。本師^ノ曰^ク。阿字十
方三世仏、弥字一切諸菩薩、陀字八
万諸聖教、皆是阿弥陀^ハ云^{ヘリ}。設根性
万差^{ナレハ}、雖^レ下^ニ緣仏各別^一念^ニ念^ニ釈迦藥師等^一人^{ナリト}、
唱^ニ南無阿弥陀^一、其^ハ仏菩薩速^ニ影向^一玉^ヲ。仰^ニ諸
神^一者、唱^ニ之^一、將^ニ蒙^ニ守護^一。祈^ニ諸天^一類、申^ニサ^ハ之^一、
宜^ニ持^ニ福德^一。設^ニ亦、智者碩学^ノ家^ニ講^ニ經論^一
無^レ隙^ニ、唱^ニ念仏^一比^ニ誦^ニ八万^ノ諸經^一。況又、
愚痴凡下^ノ族誦^ニ經呪^一不^レ遑^一、滿^ニ名号^一
同^ニ持^ニ五時^ノ說教^一、博^ニ觀^ニ六塵^ノ境^一、併^ニ弥陀^一
実体^{ナリ}。見聞覺知、何^カ冥哉。七声響、都^ニ
如來說法^{ナリ}。開示悟入、誰迷^ハ乎。誠知^ス、
行住座臥^ニ遂^ニ九品往生^一、造次顛^ニ沛^一
極^ニ西方十樂^一。往生^ノ非^レ難、值^ニ念仏^一、即、

「十八紙

【頭注3】
裏書③
大悲、甘露、智炬、四劫、長劫

往生始^テ無^レ之。值^ハ念^ニ仏^ニ、即、無始元來ノ
往生也。念^ノ時^ハ、即、忘^レ我^ヲ、念^ノ外^ニ更^ニ
無^レ仏。一遍^モ同^ク可^レ申^ス高^ニ声^ニ也。自身^モ他^モ
人^モ、共可^レ遂^ニ往生^ヲ也。一遍一念往生^モ、
天真ノ空^ラ晴^レ無^シ一雲^モ。十遍十念往生^モ、
独朗月明^シ耀^キ法界^一、利益平等ノ往生、
自他不^ニ成^ニ仏^{ナリ}。爰^ニ、高声踊躍念^ニ仏^ニ、
大明神御託宣ノ内証、如來金口より
いて、明者なり。如來金言に、踊躍
とはありとも、仏法者の威儀、大
形心水を静るを、仏教為本懷と
いふ人これあるへけれども、それは、
聖道諸宗の心なり。浄土門の心はし
からず。一遍上人の御法語云。諸宗法
門は、漫々たる鹿海の上に船浮て、
是をゆるさしと船を閑て、魚を釣^{ント}
するかことし。波しつまるへからず。
波風はたゝはたて、其儘水中に
釣沈れは、自然と魚を取なり。浄土
法門も如此。三毒の波風、動せは動せよ。
其儘置。他力名号の釣を沈れは、
天然として、人天の魚を取なり。
其故、般舟三昧經に、若坐若立行
法、在之。不可生^ニ疑難^ヲ。大明神、及度
度御歎德、御託宣、仏教合会する。
春日^ニ、遠^ニ覺^ニ背^ニ衆^ニ喜^ニあり。新羅、寺家
回祿笑顔見る。誠、水波の湿性^{ウシ}へた
てなきににたる者歟。和光利物始終、

【頭注4】
奥州浅香郡
山形に
在所
百性
六十余
年貢
奉行
四條町
鏡買
天照大神
正体
国之宝
勢小
ケレトモ

裏書④

「十九紙

「二十紙

「二二紙

神仏兩道御方便は、内外宮頭。雲州
大社御宝殿、雖^ニ明^ニ了^ニ、時移年積、知
人少^レ之^ニ處、当社大明神^{ヤブレ}廢^ニたる再興、
隱^ニたるを顕^ニたまへる神慮、忝^ニ者^ニ乎。
大社弥陀極樂界、結縁衆生成^ニ仏道^ニ。
然、随縁利物御内証なれば、何^ニ西方^ニ為^ニ
送^シカ方便也。彼^ノ礼^ニ文^ニ明^ニ者^ニ也。於^ニ彼大社^ニ、
弥陀、大日、並^ニ坐^ニ。結^ニ縁^ニ繫^ニ屬^ニ事^ニ、可^レ思^ニ合^ニ
之^ヲ云。又、子歳、参籠長々なり云とも、
京都より錦^{ニシキ}の戸帳^ト下着して、名号
を書、御前^ニかけ、其後下向あるへ
きよし、仰有。又、午歳、御宝殿の沙汰、
神妙に思食。但、大明神は、あつかりたる
分なり。其故は、午^ノ歳^ノ決定^シ極樂^ニに生^ニ
き住所の宮殿を、今此世にて作置
たるなり。然は、戌^ノ歳^ノか早世事も、あるへ
からず。心安おもふへきよし、御託宣
ねんころなり。其時、子^ノ歳^ノ、ふと思出彼
成沢池の事、山上して拝見申さん、
如何、と申入たりければ、今拝まるへ
からず。其故は、彼池は、別して主を定たる
によて、拝見の衆生^ハ短命^ニなるへし、と
仰あり。重而申様。縦、今生^ハ短命^ニに候
とも、後生如何と申入られければ、さ様
の衆生には拝まるへきなり。但、後生は
しろしめすへからず。いかんとなれば、
大明神、末世に出現し給事は、偏
に愚癡の凡夫の現当二世のため。然は、

諸財
涌出
鏡腹巻
武士見
行幸底
后采女
見返ル
翁四国
持下此
頭タル
十兩財
尽^ニナル
カト問
百五十兩
二百六十
人不見
国還

「二二紙

衆生多是現世をのみ祈申によりて、
拝へき衆生の短命をあはれみて、
御返事有なり。此神慮を背、しめて
所望申さん事^{ツマ}おいては、今生の望
をはかなへ、後生をはしめすへからず。
この池を拝見せんと思はん衆生は、
ふもとに高田の水^ト流水有り。かれを見
よ。即、彼池の下よりなかれ出る水なり。
是^レ中の水なるへし。其よりも、下の
水あり。即、御前の河なり。上中下、三
しきにあり。凡、山^一上の池は、御山のひつ
しさるの方によりて有。池のひろさ、
一間はかりなるへし。御したゝりたるによ
りて、この河の水、不浄にてくむへから
すとなり。其後、関白殿、御託宣有
けるに、此水事、重而尋申さるゝ。然、成
沢池と申外に、三式水に別の水に成らん
申入たりければ、更に我はしらす。大方
水の次第、大明神の御託宣^ニおなし。
ゆめゝ別の水しろしめさすと
て、御あかりありけるとかや。然、極楽
の宝池には、水を八功德水と名付。蓮
に三輩九品有。今、此成沢池には、
水に三重の位あり。蓮、又、御発句に
あり。彼是を思ふに、何も衆生根機に
対て、濁世末代の凡夫、出離解脱、往
生極楽のしなを表給者歟。忝こそ
侍れ。されは、大明神栖^{スミ}たまへる成沢

「二三紙

池は、九品八池の粧^{オシキ}を爰にかたとれる者か。
其九品者、観経、随他観門畢後、随自
意本意。其最初上々品説相には、念仏
所具三心三種受法説、並兼横^ニ九品心^一、
定散両門ノ秘藏たる、本願超世ノ利剣を
は修行六念ノ箱^ニ納、下三品ノ大敵を対治せ
むかためなるへし。当品ノ枕^ニ前^ニ誦誦大
乗行^ヲ説、顕^ス堅^ノ九品^一。上中品^ニ至^テ解第一義
観心^ニ、六凡四聖^ヲ空^ト解^シ、深信因果^ト誠^ル。尋^レハ
他經ノ証、不壞世諦、建立第一義諦説^レ
たり。爰以、今此品^ニハ不謗大乘^ト憶持。回
向願求ノ窓前^ニハ、弥陀与千化仏^ト同時来、
授手^シ玉。迎接ノ月高^ク晴^レ、行者身作紫磨金
色ノ膚、忽^ニ顯現上下品、受法^ハ發菩提心^ト
説^玉。厭有為心、欣無為心、度有情心、
是也。慈悲薰^レ心^ニ、利生銘^レ肝^ニ、回^ニ上求下
化ノ思^一、發^ニ無上菩提之心^一。然而、無^ニ々垢
三昧力^一者、入^ニ地獄難^レ救^ニ重苦衆生^一。無^ニ
無碍三昧用^一者、遊^ニ天上^一不度^ニ著樂
人天^一。不^レ如下只乘^ニ弥陀本願^一、往^ニ生極
樂淨土^一、得^ニ六神通^一、具^ニ四接法^一、還^ニ來
穢国^一濟^ニ中^一度^ニ人天^一。依^レ之、忽回^ニ向菩提
心功德^一、奉^レ憑^ニ弥陀迎接^一也。中上品
行人、小乘根性凡夫也。五八十具戒
品^ニ、恒沙ノ衆罪^ヲ誡^テ、微細犯過^モ皆制、十
過殊過^ヲ、四重尤重、防^ニ殺盜淫妄^一、非^一、
止^ニ貪嗔邪見惡^一、回^ニ淨土^一往生^{スル}。此是^ノ
品ノ受法^{ナリ}。中品中生行人、昼夜^ヲ分持戒^ノ

「二四紙

人、一日一夜清淨ナレハ輕罪迄モ滅タリ。中下品

人ハ亦、孝養父母善人ナリ。此品ノ人ハ、順フハ父母之

命、和ナリ於_二伯瑜泣_レ杖_一。非_二郭巨之計_一、与_二金玉

孝妃_一。非_二王祥之宮_一、備_二魚鳥父母_一。昼随_二母

心_一暮日、夜_二任_二父ノ命_一戴_二星_一。金谷園春_ノ

朝_ニハ、折_レ花悦_二父ノ眼_一。上林苑之秋夕、拾_二菓

慰_二母ノ心_一。冬至前後、八夜寒風破_レ竹之時、

盈_二于金裘_一防寒_二等_一、孝行雖_レ尽_二心_一、未

聞_二佛法_一行人。譬、彼孟宗_{ホウ}弘_レ雪抽_二筍_一、未_レ養_二

法身惠命_一。王祥破_レ氷求_レ魚、還結_二地獄

業因_一。然、当品人、臨終断命一刹那、一

期所修孝善回往生人也。下上品十

惡輕罪人。善人、雖_レ說_二多經_一、喰受之心浮

散心散_二故_一、除_二罪稍輕_一散撰_二聞声_一願_二有

無_{ナリ}。有人云。凡夫行中、称名最勝、所_二以然_一

者、凡夫雖_レ修_二自余妙行_一、其心散漫_二シテ

而不_二相續_一。其行難_レ成。唯、称名_二行_一、常

不忘_レ仏。不忘_レ仏故、成決定業。謂、忘_二

心_一仏時、口称_二仏名_一、其声入_二我耳_一、引

起_二我心念_一。々々若起、此念亦勸_レ声_一、令

唱_二仏号_一。是故、念_二ハ勸_レ声_一、声起_二念_一、常不

忘_レ仏。有此益_一故、法藏比丘立称名

願_一、実_二望_二凡夫_一時、万行万善中、称名_ハ

第一_{ナリ}。仰、案_二仏願意_一、感涙難押。

爰以、善和屠牛業具、尚往生玉

池中_一。下中品破戒人、偷僧祇物現

前物、不淨說法、无漸无愧而、自莊嚴

罪深。獄火一時逼來、出_レ声_一不_レ出_レ声_一。

「二五紙

知識、大悲方便_二弥陀ノ威徳_一說_二聞_一。名

号不思議不_レ淺。聞得_二六字經_一意、不_レ

次_二一念_一、一念_ニ、火車冷風翻、吹來_二床_一

上。諸天花雨_一、化仏菩薩迎接、一念

往生不疑。七反帰俗雄俊、忽免_二獄_一

門_一、此品心也。下々品五逆人、惡_二惡

重_一、臨終回心不疑。一家尺云。下品下

生凡夫等、十惡五逆皆能造、如此。愚

人多造罪、經_二歷地獄_一無_二窮劫_一。臨終忽

遇善知識、為說妙法令安隱_一。刀風解

時貪忍痛、教令念仏不能念。善_一友告

言專合掌。声々蓮注滿十念、念々消

除五逆障、乃_ニ金花光明照行者_一、身心

歡喜上花台_一云。是_二三々九品淨土_一名

たり。次、明神栖給へる成沢池者、八功德

池也_一。大經云。八功德水、湛然盈滿、清淨

香潔、味如甘露、乃_ニ至若入宝池_一意、欲令

水没足、水即没足、欲令至膝、即至于膝、

欲令至腰、水即至腰、欲令至頸、水即

至頸、欲令灌身、自然灌身、欲令還復、

水輒還復、調和冷煖、自然隨意、開神

悦体、蕩除心垢、清明澄潔、淨若無形_一云。

是上_二云所_一、九品八池有様也。今、頂上成

沢池者、是則、過十萬億淨土_一、來娑婆

界顯給、大明神心水。本覺理性覺体、

生仏未分、天地未開、一滴万象、森羅

根元也。依之、度々御託宣にも、我

みたらいは大日如来智水_一、或、弥陀智

「二六紙

「二七紙

願海水とも告給へり。いづれも内証一味の法水なれば、垂迹和光神明為栖。成沢の池にも、水に三式の品ありといへとも、源只同一感味心水也。

浄土三々九品差降あれとも、同一無差願海帰入すれば、凡聖ともに、顔貌端正、超世希有也。本迹無

二化道、唯仏独明了之法体、表成

沢池。凡夫眼力不及事、誠難有御方便乎。爰以、当社参詣之輩、全

極樂世界之九品蓮台運歩可。

同御神託、忝こそ侍れ。

高田大明神縁起卷上

奥書云。

右、此縁起者、雖_ニ浅智短才ノ極_一ヲ、任_セ御

託ノ趣_ニ、法印頼尊_并沙弥其阿弥陀

仏、記_レ之、奉_レ納_ニ御殿_一者也。

嘉慶二年_{丁卯}二月三日 頼尊判六十二才
其阿判八十八才

同年九月廿三日ノ御託宣_ニ、此ノ両卷ノ縁起、入_ニテ

箱匣_ニ深秘_一藏、納_ニ真殿_一後、不_レ可_レ出_ニ社内_一。但、

三年_ニ一度、十一_六所行_一幸ノ時、祠官七日精進、捧_レ之。不_レ開、可_レ令_レ見_ニ諸人_一。一見ノ功_一徳莫

大、必可_ニ至_ニ仏土_一。求_レ不_レ可_レ及_ニ披見_一者也。

依_ニ此ノ御神託_一、御行幸ノ前七日、垢離ヲ取リ、

荒蔭_ニ臥、錦_ヲ以_テ裹、垂_ニ覆面_一、無言_ニ持_一、

十六所_ニ御_一行也。此ノ箱一見ノ輩、必可_レ有_ニ御

引導_一。及_ニ度々_一御託宣、忝御方便乎_ニ云。

「二八紙

有時、御託宣。此箱、赤沼カ子孫可_レ持_レス之_ニ云。

大日變成弥陀尊 末法示現大明神

弘通西方弥陀号 引接結縁衆生界

此八句礼文、又、御託宣也_ニ云。

私云。予_嘗信、雲州富田特留山信樂寺建立。

功終以後、慶長四年秋ノ比ヨリ、渡_ニ海隱州_一勸

化_ニ国中_一ヲ。爰_ニ、同国島_一後都_一万院_ト云在所_ニ、名_ニ高

田大明神_一、靈験無双在_ニ明神_一。其ノ御殿_ノ

内_ニ、不_レ明箱在_レ之。此_ニ卷_一 同年九月八日ノ夜明_レハ、

九日ノ曉方_ニ、不思議ノ靈夢在_レルカ之故_一、於_ニ神前_一

開_レ之、拝読時、神主、宜_レ称_ニ以下諸人_一、驚_ニ耳

目_一、帰_ニ入_ニ浄土門_一。其後、彼ノ箱ヲ申請_ケ、此兩

卷ヲ書_ニ写_一之_ニ畢。弘通所_ニ、万人一帰、国中

貴賤、男女不_レ残、悉趣_ニ念仏門_一者也。

慶長四年九月十三日夜、書写之。

雲州富田信樂寺開基樂運社信譽秀翁（花押）

欲_レ写_ニ時、深_ニ秘有_ニリシノ之間、後見ノ人々、可_レ有_ニ心_一。深

可_レ敬。就_ニ中、下卷_一、神道之極致。故、余_リ不

可_レ談_レ之_ニ禁_一誠_レハ、別_ニ紙有_ニリシヲ之_一、失念_ニシテ不_レ写者也。

「三十紙

高田大明神縁起下

「（外題）

高田縁起下

沙門信譽「（端裏）

礼文云

大日變成弥陀尊 末法示現大明神

弘通西方弥陀号 引接結縁衆生界

高田大明神縁起之下

さる程に、御宮渡すぎ、一両日あて、子歳の

「二九紙

所労は長病なりけるか、以外大事に成、存命
既かぎりに見え給処に、花の乳母、請し

申さるに、彼宿所にいたり給。病者を暫ま

ほり給て、様々事共仰有ける中に、彼病者、

悪霊多く付たる^{ナリ}。信仰も不足なり。さる程に、彼

祈禱を釈迦弟子度々申入^{ルニ}、形に聞召入すと

云へとも、此処に出世しなから、争か捨へきなれば、

慈悲をもて守給なり。彼霊ともにひかれて、かなら

す臨終も正念なるへからず。雖然、ふかく祈誓を

至さは、霊ともを顯^シてのくへきなりと仰有て、はた

とにらまへ給へは、又、暫ありて、彼悪霊とも、一々に

其形を現して、思々の事とも云顯^シして、各たち

退くけしきなり。されとも、猶のつと思々に

立帰り給ける。其後、又、重而宮中より仰送

られるは、彼^ノのこる処の霊は、尤大事の霊なり。

其上、**定業**いかゝせん。信仰も亦不足なり。但、我宿

所の新造を一^{ライデン}拝殿に立てまいらするならは、

其しるしにのこる霊を退、暫の命も延へきなり。

御神託のよし告奉りければ、子歳承て、信心を

いたし、則、彼一字をこほちあげ、拝殿も立申

ける日より、すこし心地本腹^⑧し給けるとかや。就

其、忝神慮おほしと云とも、悉く注すと覃

はす。同十二月十五日午剋はかりに、内方子息^⑤

と名付て病者云けるは、いつくよりともしら

ぬ童子来て、黄なる札を我与給。右の手に請取申

たり。是^⑥を見るやと仰られけれども、更々見申

さすと兩人共に申さるゝに、ふしきやまさし

く持たり。此札見よと、両度まで仰られ、その

「一紙

のち誠に心地^{コ、チ}もさはくとおはしますけしき

にて、念仏数百遍唱給、正念に住し、眠ことく

して、申時の終程に臨終したまふ。俄間様に

人々驚歎きあへる。歎のあまりに、大明神を恨

申者もあり。是併、大明神の御虚言なりと申

物も有けるとや。其後、彼中陰初七日すぎ

て、戌時に、大明神、亦、花の乳母に託して仰

あり。彼子歳臨終の事に付而、衆生其中に、

我を恨あさけり申ものあり。返々おろかなり。

まして、愚癡の凡夫と云とも、是程の事はしる

へきにしらすは、なとか子細あると思はすして、

平に恨申事、誠にふしきなり。其謂は、彼仁定

業なり。もとより、信不足なるによて、悪霊多く付

て臨終をさまたけ、三惡道に趣くへきにて有を、

我此所に出世しなから、かれを地獄におとさん事、

不便に思食、慈悲を以方便して、新造^⑦拝殿

に立まいらせよ。命をもしはしたすくへし。

われに祈誓をふかく至せとおしへによりて、

命の些ものひん事を恨^⑧、無二の信心をこし、

祈申き。然間、凡は十月十日、十一日の比臨終すへ

きにてありしをも延、又、十一月廿二、三日には必死^⑨へきを、悪霊悉く

退け、正念に住し、順次に往生をとけさせ、

道場の本尊諸共に、極樂へおくり、上品上生の台に

預申置たり。其証拠の為に、帝尺^⑩人^⑪進し、金の札を

所望申せしに、両度まで叶ましき^⑫御返事

ありしほ、重て申たるによりて、三度めに童

子をもて下さる。則、彼童子にて札を病者に

わたす。さる程に、病者妻子^⑬をよひて、此札見るや、

「二紙

両三度向しは、この為なり。大明神は、如此御計あれとも、猶、衆生ともふしんをなし、御虚言なりと申さは、帝釈にや約束申たる子細あり。もとのことく、彼子歳、様樂（様樂）より取返し、帝尺に渡へきなり。其為に、預申（マ）とたるもの也、との御託宣を承、心ありもなきも、皆々かん涙（ルイ）をなかつはかりなり。様々におこたりを申ければ、すこし御気色やはらかせ給けり。其後は、いよ／＼日に随、時に増て、諸人信仰をいたし、現当二世を祈誓申とかや。かくて、同五月（同）の参籠に、時衆中に、夢想に蒙れり。

花に今なるさわ池の蓮かな


此池は、御山のいたゝきにあり。其名なるへし。大明神の御発句にておはします由、御託宣あり。今、すてに大明神御出世有て、神威の開る所をあそはされたるにや。蓮の事、御本地大日如来の浄土、蓮花蔵界と經に見たり。此所、則、覚王浄土なるをや。又、極楽浄土の八功德池の蓮花、則、弥陀正覺花なり。然は弥陀大日、一体分身の証拠、こゝにあり。如来浄花衆、正覺花化生云り。将亦、和光の証を尋れば、笠置（カサヅキ）の解脱上人、後生菩提を祈せい申されける。夢想到、伊勢大神宮へ参詣し給たりければ、内外両宮の間、大小蓮花さき乱、つめるはなあり。開花あり。尋申せば、当社の神官の往生の花なり。既に往生したるは開、いまた生れさるはつほめり。答。其時われもし今度生死を離すは、再人間に帰、神

「三紙

明の社人と成、極楽に往生せんと誓給けるよし、和光本誓記に見えたり。今此大明神、毎度の御託宣も、我みたらいに歩をはこふ輩、もらさす今生の望をかなへ、後生には上品上生の花の台に導かんとなり。是、此蓮花を真言密教意には、方寸の胸（ムネ）内、八分婢羅戸（ヒ）あり。悟の前には八葉の心蓮台と顕也。此蓮台の上、咒字あり。咒字反して月輪となり、月輪、即、我心（ミ）起菩提心姿也。乃至、非情草木皆備（タリ）。青草白露の色も、阿字質也。心（ハ）五体身分に遍すと云とも、恒（コ）棲は妙法心蓮台也。我神（ミ）宿すを、阿字觀とは申也。受苦受樂は、我一念の心有故、此理を知人、心（ミ）浄土をかまへ、自往生。此理迷ものは、自地獄を作、心から苦を受也。蓮華三昧經云。胸中（ウツ）両部万茶羅坐列、各下転神反したまへり。其中、西方ノ無量寿如来、掌（テ）說法談議徳、常恒說法。其音自（ミ）我口（ミ）出、成声塵（ミ）作利益（ミ）なり。凡夫、不知之。我語しと思し、被對我物執情、恒沙万徳無量宝号、名字功德法門氣声、只徒成（ミ）惡趣の業因とのみ。誠可（レ）悲等（云）。又、有真言投機之學者、疏（ミ）中（ミ）問云。以（ミ）弥陀（ミ）為蓮華部主。所証法門（ミ）為蓮花三昧。意、如何。答。一切衆生、皆本浄心蓮（ミ）令（ミ）開敷、是（ミ）云蓮花三昧。大日經疏、即觀（ミ）自身（ミ）、作（ミ）八葉蓮花。凡人

「四紙

「五紙

汗栗駄心アリ。狀如蓮花而、含未敷之像。有筋脈。約之、以成八分。男子向上、女人下向。先、觀此蓮、令開敷、為八葉白蓮花。此所觀蓮花者、即、弥陀ノ法身。又、能開方便者、即、弥陀本誓。是故、為蓮花部主。問。何故、殊以弥陀ノ三昧、開心蓮乎。答。弥陀は是、第六識轉得妙觀察智ノ仏也。三世十方如來、皆悉、以此智開本地心蓮。成花台ノ果徳也。觀經云。仏告阿難。如此妙華、是本法藏比丘願力所成。祖師云。願力所成者、三十二願云。自地已上、至于虚空、宮殿樓觀、池流華樹、國中所有、一切万物、皆以無量、雜宝百千、種香而共合成、嚴飾奇妙、超諸人天。此願中、撰一切依報、花坐亦此中有。凡蓮花出淤泥、本來清淨。心无染无濁事、譬如蓮花。曰是譬喻蓮花。亦是、衆生ノ心色、諸仏覺體、併蓮花ノ直體也。肉団八葉ノ心蓮、曰之仏心紅蓮花。是則、衆生心色、覺之レ仏。仏界心蓮清淨ナレハ、衆生ノ心蓮、亦清淨ナリ。正知、色一心一體性相一物也。心性則真如。真如ハ則、心色蓮花也。曰之當體蓮花。故、仏モ坐心色蓮花、報土心蓮ノ上建立。靈山老師、於此觀殊顯除苦惱之名。經云。仏告阿難及韋提希。善思念之、仏當為汝分別解說除苦惱法。汝等憶持、広為大衆分別解說。說是語時、無量寿仏住空中。除苦惱一法ノ音驚、応聲苦惱除。法者我來現給。善導、此判、娑婆化主為物故、住想西方。安

「六紙

樂ノ慈尊ハ知情故、則影臨東域。觀法深要ナリ。急救常没衆生、妄愛迷心、漂流六道。汝持此觀、処々觀修シテ、普得知聞、同昇解脱等。經、此觀結此想成者、滅除五万劫生死之罪、必定当生極樂世界。剩、五百侍女、発阿耨多羅三藐三菩提心、諸仏現前、三昧ノ記蒙れり。經說韋提侍女益云。併希与五百侍女、聞仏所説、応レ時、即見極樂世界広長之相。得見仏身及二菩薩、心生歡喜、歎未曾有一廓然、大悟得無生忍。五百侍女、発阿耨多羅三藐三菩提心、願生彼国、世尊悉記、皆当往生、生彼国、已得諸仏現前三昧。大明神御発句、解脱上人御夢想、經論尺唯明文、誰疑惑輩カ不仰レ之乎。浄土不共教門ハ、踊跳心地、剥尽悟解。仏意ノ一乘弘願ノ教故、実我実法妄執繫念、儘、无生解脱ノ本分ニ叶。此則、仏願他力之神力也。所以、今此信樂ノ帰神道、愛妻愛子、隨願満足、惜身惜命、任心存在。莫謂、和光同塵ノ結縁。仏神同体之大悲、現当一時而度脱之智深、豈度現世不濟後世。又、引後世不護現生。然則、仏法全神道ナレハ、願求往生、即、称諸神冥慮。神道即仏法ナレハ、祈念福智、尚預諸仏護念。何況、云三世諸仏依念仏三昧成等覺。故、弥陀是、諸仏本師也。又、云威神光明、最尊第一、諸仏光明、所不能及。故、諸仏威神、不レ及弥陀。既是、无量三昧所主故、此尊、即是、大元宗祖

「七紙

「八紙

神也。諸法統惣、三昧万徳、所帰要法、摂化无極、神道如意、応用反現、自在化益。若能如是信得及、水波無二之化道、故、月蓋長者析^シ現世除厄^{ヤク}、三尊臨門闥^{コン}而与^ニ神藥^ヲ。在能、有頼^{ヨリ}、求^ニ熊^{クマ}獸^ノ血^ヲ塗^ニ、聖容顯岩室^ニ而、示^ニ金身^ヲ。豈^ニ仏法外^ニ更^ニ覓^ニ神道^ヲ乎。又、神道全仏道、仏神同体大悲、現当乍^レ悉^ク円満^{スル}ヲ。請願^ハ、欣求^{シテ}淨土^ヲ、雖^レ唱^ニ念^ニ弥陀^ヲ、莫^レ廢^ニ神冥^ニ。又、乞再拜諸神社祠等、雖^レ帰依^ニ靈神^ニ、專^ニ念^ニ仏陀^ヲ。若爾、仏法神道不離不即、神道仏法不即不離、一求兩願、自然満足。易往易修、頓教搜玄、即冥理体^{ナレハ}、正絶^ニ一異^ヲ有^ニ无^ヲ、假名^ヲ。他力難思化用、不^レ捨^ニ淨穢^ヲ凡聖^ノ実執^ヲ、超^ニ心地^ヲ方便^{ナレハ}、不^レ改^ニ邪執^ヲ而顯^ニ正見^ヲ。即往生^ニ之无生^ヲ、不^レ假^ニ修行^ヲ而入^ニ真如^ヲ。然則、濟凡秘術^ノ投枕^{ナレハ}、実我妄情、全^レ背^ニ神慮^ヲ。終窮極談^ノ深意^{ナレハ}、心念、口唱、不^レ離^ニ靈光^ヲ、无量三昧之所主故、塵々応用之從神也。当知、諸法統惣^ニ之神体^ヲ、万徳所帰御宝殿乎。当社大明神、无窮無極之御慈悲、現当兩益内証、一心專念之神体、当座道場神殿、誠^ニ難^ニ有^ニ御方便者乎。当社ノ御本地、天神七代最初^{ナリト}、度々ノ御託宣也。天神七代第一^ハ、国常立尊^ニ御座也。国常立尊^ヲハ、曆道者名^ニ槃^{ハシ}古王^ト。程頤曰。幽明^{シテ}而有^ニ二物^ヲ。是、号^ニ神^ヲ、无形、能養^ニ有^ニ形者^ヲ。為^ニ万物^ヲ為^ニ靈性^ヲ。是^レ於^ニ禪那^ヲ者、名聖諦第一義、号^ニ空劫已

「九紙

前^ト。謂^ニ威音王仏以前^ニ、名^ニ三生下未分話^ヲ。教内^{ニハ}、是云^ニ毘盧舍那^ヲ、或云^ニ本覺真如^ヲ如来^ヲ、或名毘盧舍那^ヲ、或名无相本有大日如来^ヲ。大日經曰。心王大日説法^ハ真心者、息也。又、法華經云。既、知息已引入、於^ニ仏惠^ニ此息^ヲ、西方息風也。西方金々肺^ハ臟也。息者出^ニ自^ニ肺臟^ヲ、肺^ハ風大^{ナリ}。人界去來動転、風作略也。故、於^ニ医道^ヲ、肺臟号^ニ氣口脈^ヲ。為^ニ人命^ヲ定^ト。諸脈雖^ニ断絶^ニ、有^ニ氣口脈^ヲ則^ニハ、人命余^{アル}カ故、号^ニ脈風主人^ヲ公^ト、金剛正体^{トモ}、号^ニ无位真人^ヲ、謂^ニ阿弥陀^ヲ。西方金故、念^ニ仏時^ヲ扣^ニ鐘^ヲ、金西方主也。於^ニ口^ヲ有^ニ開合^ヲ。雖^レ不^レ申^ニ念^ニ仏^ヲ、出息入息、阿吽也、開合也。念^ニ仏申^ニ見^ニ則^ニハ、南^ハ無^ニ阿弥陀^ヲ。是^レ即、吽^ハ吸^ニ息^ヲ、是^ニ念^ニ仏也、一切^ニ經也。於^ニ禪那^ヲ、阿吽^ハ号^ニ二喝^ヲ。々々商量、会得^{スル}則^ニハ、出入息、一切^ニ經也、仏心也、神道也、易道也。故秘鍵云。仏法非遙、心中即近。文殊偈云。大智自^ニ心^ヲ發、於^ニ心^ヲ尋^ニ何處^ヲ。天台觀經疏曰。自性法身^ハ仏土^ハ即身即仏土也。即心即仏、尋^ニ心外淨土^ヲ則^ニハ、十万八万。千里遙遠、見^ニ唯^ニ心ノ仏^ヲ則^ニハ、即心是^ニ仏。起居動靜是^ニ仏。出息入息者、是^ニ胎金^ヲ兩部大日也。出息為^ニ金^ヲ、入息為^ニ胎^ヲ。六根者、色淨土也。心者、空而弥陀也。以^ニ阿吽^ヲ二字^ヲ、為^ニ二字^ヲ念^ニ仏^ヲ。无念無相^{ナル}則^ニハ、帰^ニ阿字^ヲ一字^ヲ。況、国常立尊、号迷悟生^ハ仏之根元、天地未分

「十紙

源也。是、天真之徳、一心本有、性相二徳、是名為陰陽^一。一切諸法、無不陰陽和合^二。神明非他、即、本有一心性相也。此国常立尊^{ヨリ}天照大神迄、八代也。天神^モ七代過、地神五代最初^カ天照大神^{ニテ}在^ス。伊勢内宮陰神、女也。神体以^レ石造^ニ八葉蓮華^一。於其上有白竜^一。是、胎藏界大日如来。白竜、我等一心空也。心王蓮華^ハ、色界也。色空不二^ノ体ナリ。外宮陽神、男ナリ。神体者、以石^ヲ造五輪。於空輪上^ニ有白蛇。自往古到今、常住不滅体ナリ。白蛇、人人自性体也。其自性体者、法身也。法身者、周遍法界、真如妙理、遍一切处、毘盧舍那体性也。花嚴云。法身遍滿諸衆生、客塵煩惱所覆藏、不知此身有如來、流轉五道無出期^文。凡三界火宅^ハ、五蘊仮宿、以法身^ハ、為常住家主。不捨我宅^一只独也、全以為常栖。客将来^{スレトモ}無留、五蘊仮宿、以法身為家主^一、以業煩惱為客塵^一。本有法身不離、我依^ニ妄想顛倒之心^一、且雖起^ニ惡業煩惱^一、無明体相、本是不有^{ト云}。依一念善心^ニ、遂無^レ留^ニ心中^一。仏忽^ニ顯妄想夢即覺。所以、真如月鎮照^{セハ}、黒業衆闇忽^ニ晴。実相風常扇^ハ、煩惱客塵遠払。依之、本覺秋月、且雖隱妄想之雲、始覺春花、親見^ニ覺了眼前。古賢^ニ云事^{アリ}。不輕大士、万人拜文、廿四字法華^{アリ}。是、人々具足^ニ一仏性、歸敬也。去、上位下位、男子女人、皆是仏性具足也。惠遠螻蟻^{ヲモ}不越。是法身^ノ本无生仏

「十一紙

「十三紙

源事、眼前者也。和光同塵結縁始^{テレハ}、是^ハ、天神七代之第一、彼^ハ又、地神五代最初。何^{レモ}衆生濟度大慈大悲ノ始、和光利物ノ御方便承こそ侍れ。大明神の御本地大日如来、頼尊願主として、聖を始奉り、諸人ヲ勸進^シ、御神体に顕し奉り、御たけ、御さい色、金色御光等まで、悉^ク託宣^{（若カ）}に任、あつらへ下申。七月十四日、御[＊]宮、同廿三日、御宝殿^ニ入奉^{リケリ}。毘沙門^ハ、結衆^ノ沙汰^{トシテ}、造下奉^{リシナリ}。去^ル程^ニ、歳末別時^ヲ道場^{ニテ}勤行^{アリケレハ}、大明神御影向、御託宣度々及。種々法門、御尋^{アリケリ}。中^{ニモ}、言南無者即是歸命、亦是發願回向之義、言阿弥陀仏者、即是其行、以此義故、必得往生^云。願行^ノ二^ヲ、時守知之歟。能々可弁^レ之。殊更、十八幅名号^ヲゆわれ、ふしき也。依之、京都四条之金蓮寺^{ヨリ}、十八幅名号を申くたし、花の女^ノとして御殿にこめ申けり。十八幅名号事、王本願^ノ数^ヲ表^{シテ}、御殿^ニ懸^テ秘藏したまへるなり。即、文云。設我得仏、十方衆生、至心信樂、欲生我国、乃至十念、若不生者、不取正覺^文。善導大師御尺^ニ云。若我成仏十方衆生、称我名号下至十声、若不生者不取正覺^云。四十八願、一一皆此心^{アリト}釈^シ給^{ヘリ}。凡、諸仏^ト願者、上求菩提、下化衆生^ノ心也。大乘經^ニ云。菩薩願^ニ有二種^一。一、上求菩提。二、下化衆生心也。其上求菩提本意、為^ニ易濟^ニ度衆生^云。然^ハ唯、本意、下化衆

「十四紙

「十五紙

生願^ニ有。今、弥陀如来ノ国土ヲ成就シ給^モ、衆生ヲ引接^{セン}カナリ。惣^{シテ}、何^モ成仏已後、内証外用功德、濟度利生ノ誓願、何々皆深、勝

「十六紙

劣あるへからず。然^{トモ}、菩薩道ヲ行給^シ時ノ善巧方便誓、皆是区也。弥陀ハ因位時、專我

名号^一念^{セン}者ヲ迎^{エント}誓給^テ、兆載永劫ノ修行ヲ、衆生ニ回向^シ給^フ。濁世ノ我等依怙、末代衆生ノ出

離、此ニアラスハ何ヲカ期^{セン}ヤ。依之、彼仏モ我建超世願名乗給^{ヘリ}。三世諸仏、未幾如是願^一ヲハ。十方

薩埵、未^レ在此等願^ハ。次、斯願若剋果、大千

心感動、虚空諸天人、当雨珍妙華^ト誓給^{シカハ}、大地六種震動^シ、天^{ヨリ}花雨^{フリ}、汝当正覺成

給^{ヘシト}告^{タリキ}。法藏比丘未^二成仏^一玉、此願不可疑。何況、成仏已後、十劫^ニ成給^{ヘリ}。不可不信。彼仏今現、

在世成仏、当知本誓、重願不虛、衆生称念、必得往生尺^シ給^{ヘルハ}、是也。諸有衆生、聞其名

号、信心歡喜、乃至一念、至心回向、願生彼

国、即得往生、住不退轉、唯除五逆誹謗正

法^云。此^ハ、第十八ノ願成就ノ文也。願^{ニハ}乃至十念^ト說^{ト云ヘトモ}、正願成就ノ中^{ニハ}、一念有明^{セリ}。次、三輩往

生ノ文有。是^ハ、第十九ノ臨終現前ノ願成就文也。發菩提心等ノ業^ヲ、以三輩分^{ト云ヘトモ}、往生ノ業^ハ通^{シテ}皆、一向專念无量寿仏^{ト云ヘリ}。此則、彼仏ノ

本願故、廢立、助正、傍正、三義、能々可思之。爰、一

遍上人、始熊野参詣之時、本宮証誠殿御前^ニ通夜^シ給^{ケルニ}、夢想權現御対面^有、衆生之信

不信撰^{ハス}、相合^ニ随念仏^{ヲハ}勸給^{ヘキヨシ}、御示有^{リケルニヨツテ}、六十万人決定往生ノ札ヲ衆人與^ヘ給^フ。行体、爾今

「十七紙

無退轉。証誠殿^ト申^ハ、本地阿弥陀如来、本宮地

主明神^ハ、両部大日如来^{トカヤ}。彼大明神、天若宮、御本地、金胎大日如来、阿弥陀仏^{ト云ヘルモ}、両部

不二報身ノ弥陀号^{スル也}。弘法大師入唐時、為除海中障礙^ニ、六字名号船中開板^シ、功德ヲ讚^メ給^{ヘルニモ}、

極重惡人、無他方便、唯称弥陀、得生極樂。若有重業障、无生淨土因、乘弥陀願力、必生

安樂国^文。又云。此界一人念仏名、西方便有一蓮生、但使一生常不退、此華還到此

間迎^文。真言一宗奥義、極給^{ト云トモ}、猶、弥陀名号、讚給^事、如此^{ナリ}。然、時守門家ノ歳末別時者、尋常ノ報恩謝德ノ行体^{ニテラス}。每晚冷水沐浴^シ、

每日持濟^{シテ}、七日七夜、一向称名計^{ナリ}。其故^ハ、弥陀心水沐心頂。又^ハ、一日齋戒金蓮^{ト云ヘリ}。如此

解尺^{アリ}。殊^{ニハ}、七種闍提闍^ト姿^ヲ表^ス、歳末勤行^ス。日々時々、回向^{アリ}。恒願一切臨終時^{ト云ヘリ}。又、弥陀經一日七日、一心不乱^ト說。同經云。六方恒沙諸仏、広長

舌相出^{シテ}、遍^フ三千大千世界覆^テ、誠実言^ヲ演說^シ給^{ト見ヘタリ}。又、念仏道場、諸仏諸神影向^シ給^事、般

舟三昧經^ニ、三十四億神王、億万恒沙眷屬^ヲ引卒^{シテ}、念仏行者守護^{スト見ヘタリ}。故、念仏立前三

昧^ト名付。其証、爰明^{ケシ}。当来之世、經道滅尽。我以慈悲哀愍。独留此經、止住百才、其有衆生、

值斯經者、随意所願、皆可得之^文。尺云。万年

三宝滅、此經住百年、爾時間一念、皆当得生彼^モ。

末法万年、余經悉滅、弥陀一教、利物偏増^{ナレバ}於^{テハ}淨土門^ニ、末世在世^モ不^レ可替^ル說^{ナリ}。今、此大明

神、末世濁惡^ニ出現^シ給^事、極惡最下ノ凡夫ヲ利

裏書①

「十八紙

物ノ御誓、彼超世ノ悲願ニ似者歟。 歌云。

夏山の青葉ましりのをそさくら

はつはなよりもめつらしきかなと

ある歌のこゝろにことならず。天神七代、地神五代末なれば、日域大小神祇、与物結縁の衰ゑる時分、高田大明神御出世、誠仏神両益、弥陀大日、一体分身の内証あきらけし。かくて、聖、同月十日下向し給けるに、又、御託宣あり。

名号を書、社壇にこめおはします事、

喜思食と云にも、なとや改年のはしめを待しかひもなく、法楽連歌一折も

なくて、急下向給、ふしきなりと、様々に神託の趣ありければ、早、帰寺の子細を申たりけるに、凡夫の事は大事之にて、

神事はおろかにて斟酌あるかと、重て仰有けり。⁷***神慮^(かくて)に任すへき由申

されけるに、さらば梅の発句にて、祝言を可申由有。仍、御託宣のことく、百韻の

法楽有りて、こめ申されけり。其後は、毎度参詣に、法楽連歌おこたりなし。

わか梅の花に唱ふる十声かな

かくて、御正体、門客、神子等、京都へ逃^{アツラエ}申へき。御本地^(か)*事をうかゝひ申され

けるに、大明神は金剛界大日如来、

天若宮は胎藏界大日、関白殿は地

蔵菩薩、少将殿は如意輪、一々に

御託宣有り。即、本地垂迹を任て

「十九紙

詠申。かくて、毘沙門講を始めて、毎月三日、此講に詣人結縁すへし、

御託宣なり。先、子歳懃はしむへ

しと神託有ければ、神慮に任、二月三日より彼講を始行す。毎月不闕也。

凡、毘沙門天王信仰、衆生に福分

を与給事之新なること、申すに及す。

又、仏法護持し給事、諸宗普と云

とも、殊に念仏行者を守護し給

事、大原良忍上人、弥陀如来の教

によて、多年自力行功を闇、他力

称名の行者と成、円融念仏を勧給。

融通念仏は、是偏、一人の行を以て

衆人の行とし、衆人の行を以て壺

人の行とする故に、功德も広大なり。

故に、往生も順次なり。一人も往生す

れは、衆人も往生す。時衆門下に、日没の

時、千へん念珠^(遍)の念仏、是なり。此念仏

を勧進し給の時、大原草庵に、天王

うつゝに往来し給て、彼念仏の名

帳に、自筆に入給候。鞍馬寺毘沙門天

王、毎日百返、此念仏の結衆を守護

せんかたみに入処なりと書付給こ

そ、ふしきなれ。かくて、上人、次の年、

鞍馬寺へ参詣し給。終夜念仏

し給に、ちと睡すかと思給に、上人

告給はく、以前念仏百返請奉り

ぬ。我、汝を守事、影の形に随かこと

「二一紙

し。又、同く正法（巻）お守、一切の冥衆等、諸神悉く融通念仏の結衆に入、百返つゝ請給名帳、是を奉る。本帳に加へ給へしとて、上人の前にさし置給かと思へは、眼前に一卷の書あり。ひらきて是を見給に、

梵天王部類諸天各百返
持国天王部類諸天各百返
広目天王部類諸天各百返
弁才天王部類諸天各百返
水天部類眷属各百返
風天部類眷属各百返
閻魔天部類各百返
三龍（三）子部類各百返
妙見菩薩部類各百返
訶利帝母部類各百返
毘藍婆利女部類各百返
華齒利女部類各百返
多髮羅刹女部類各百返
持瓔珞利女部類各百返
奪一切衆生精氣部類各百返
北斗七星部類各百返
月天子部類各百返
明星天子部類各百返
尊星王部類各百返
魔醯修羅天部類各百返
二十八宿等部類各百返
難陀龍王部類各百返
帝釈天王部類諸天各百返
增長天王部類諸天各百返
吉祥天女部類諸天各百返
地天王部類諸天各百返
火天部類眷属各百返
迦楼羅天部類各百返
氷迦羅天部類諸天各百返
摩利支天部類諸天各百返
法喜菩薩部類各百返
藍婆利女部類各百返
曲齒羅利女部類各百返
黑齒利女部類各百返
無厭足利女部類各百返
皐コウ帝羅刹女部類各百返
大黑天神部類各百返
日天子部類各百返
執蛇天王部類各百返
愛染王部類各百返
持世天部類各百返
九曜等部類各百返
十二神将部類各百返
跋難陀龍王部類各百返

裏書②

二三紙

婆伽羅龍王部類各百返
徳又伽龍王部類各百返
摩那斯龍王部類各百返
法緊那羅部類各百返
大法緊那羅部類各百返
樂乾闥婆王部類各百返
美乾闥婆王部類各百返
美女龍王部類各百返
秦広王部類各百返
宗帝王部類各百返
閻羅王部類各百返
太山王部類各百返
都市王部類各百返
荷君司命部類各百返
賀茂下上部類眷属各百返
伊勢内外宮部類各百返
日吉七社部類各百返
祇園部類各百返
熊野三山部類各百返
那智飛龍權現部類各百返
鹿島大明神部類各百返
大社大明神部類各百返
北野天神部類各百返
白山權現部類各百返
平野大明神部類各百返
富士浅間大菩薩部類各百返
広田南宮部類各百返
安房須龍口部類各百返

二四紙

和修古龍王部類各百返
阿那婆達多龍王各百返
優鉢羅龍王部類各百返
妙法緊那羅王部類各百返
持法緊那羅王部類各百返
樂音乾闥婆王部類各百返
美音乾闥婆王部類各百返
摩睺羅伽部類各百返
初江王部類各百返
五官王部類各百返
變成王部類各百返
平等王部類各百返
五道転輪王部類各百返
司禄部類各百返
善如龍王部類各百返
宇佐八幡大菩薩部類各百返
春日四所部類各百返
松尾大明神部類各百返
日前国懸部類各百返
金峯山蔵王權現部類各百返
香取部類各百返
熱田八剣大菩薩部類各百返
伊豆走湯部類各百返
稻荷三所部類各百返
立山權現部類各百返
三島大明神部類各百返
輦防上下部類各百返
多度部類各百返

住吉四所部類各_{百返}

箱崎部類各_{百返}

大原野部類各_{百返}

大多牟智部類各_{百返}

氣比大明神部類各_{百返}

朝氣上下部類各_{百返}

多賀大社部類各_{百返}

三輪大明神部類各_{百返}

竈山法王大菩薩々々々々

伊都幾島部類各_{百返}

瀬振部類各_{百返}

伊多幾曾大明神部類各_{百返}

厳島大明神部類各_{百返}

三所上下宮部類各_{百返}

天ノ河弁才天部類各_{百返}

伊吹大明神部類各_{百返}

竹生島天女部類各_{百返}

播磨和荒田部類各_{百返}

弘峯部類各_{百返}

江島天女部類各_{百返}

小一領部類各_{百返}

大山権現部類各_{百返}

欲界世界無色界、所有一切、天衆各百返。

惣、三千大千世界、乃至微塵數、一切諸

天神祇等、部類眷屬各百返。以上、惣微

塵數倍百万返_ト書付給_{ヘル}。誠、不思議_ノ奇特、

言語_ノ及_ニところにあらず。和光本意達

給事、諸神以如此。松尾記云。天慶元年六

月中旬、空也上人、雲林院_ヲ出_テ、平ノ京、大宮大

路を南向、及_ニ夜深更_ニ、心澄_{シテ}、只一人高声念

仏申下給けるに、後より、あらずむや、

悲や、物きせ給へ、上人の御房、と云声

あり。空也上人、怪_{アヤシク}思召様は、これほとあ

つき折節、寒と云事不思議さよと

思食て、立帰御らんすれば、既七旬余_ル

老翁、白髪として、面には涓浜_ニの波を

たゝみ、眉_ニ高山霜を垂、履冠指貫_ツ破、

腰_ヲ傾_{カクムケ}て深敬、大路踞_{ウスクモリ}居たり。上洛様に

見たり。聖人問云。何人にて座ぞ。か程

「二五紙

に熱、九夏三伏炎天、寒を歎坐そ

や。御らんすることく、我身には着_{キタル}たる

物もなし。藤_{フジ}ノ衣は袖はつれ、紙衾_{カミフスマ}は

肩破、纒_{ハツカニ}に背はかり也。脱可_レ奉衣も

なし云。何を御らんしてか、我物

をは乞給そやとのたまへは、老翁

かさねて申給。我是、王城守護

鎮守、松尾_{ツタ}ノ明神なり。古、寂光の都に

住、鎮受无為快樂。然今、被引_ニ衆生思_一、濁世

末代垂跡、交_{マシハル}和光塵間、忍辱衣は衆生惡

業嵐はけしく吹て破はて、和光形難

挑、煩惱妄想水堅固なれば、感応月

宿事なし。然則、念仏法施衣預、濁惡防_{フセキ}

風、妄想雪霜をも除かはやと存する

なり。苙所、綾羅錦鋪_{キンポウ}之衣、无_レ由。返々、念仏

法施衣、願わしく候給へは、聖人聞之、此大

悲利生誓、随類応同之悲歎座由を

感して、拭_{ノグイ}涙解脱幡相衣袖、含悲_ヲ

無為所着袂。年来念仏、甚深妙行、他力

難思之法施を、昼夜恒唱しめたる衣

にて候とて、浅猿_{アサマン}けなる藤衣脱て、

明神奉給。老翁敬て、上人礼して言

様。九夏三伏炎天に、清冷秋風袂_{セト}ニ冷、

玄冬_{（寒）}初雪寒朝、温和之春日膚_{ハダエ}ニ暖_{アタカ}

なりと喜歸給へりとなん。上人此事を

感して、詣松尾社壇、七日念仏。七日既

満_{スル}日、神明感応_{アツテ}、自開_ニ御戸_一、御衣帳被

懸_{タリ}。其時、上人弥随喜涙_ヲ流_{シテ}、重三七日間、

「二六紙

「二九紙

「二八紙

「三十紙

殊^{イデシ}慇懃^{スミシテ}信心抽^ニ、唱念^ニ仏^一。依之、内証月静^{ニシテ}、

三五光照真如宮、外用風和^{ハナフサ}、平等^{ハナフサ}蕊^{ハナフサ}

散利生道^一。然則、和光利物方便^{ニモ}、為念

仏助縁^一、上天下界冥衆、悉歸念仏給

事、神明^ハ仏陀垂跡、仏陀^ハ神明^ノ本地故、

就中、弥陀三世本主、一切菩薩師

般^ハ、不蒙弥陀印可、不可叶菩薩得

道。經云。東方諸仏国、其数如恒沙、彼

土菩薩衆、往觀無量覺、南西北羅、

上下亦復然、彼土菩薩衆、往觀無量

覺^文。依之、毘沙門天王、神祇冥道勸

化、和光同塵本懷、釈尊出世本意者

也。

高田大明神縁起卷下

右、此縁起者、雖淺短才極、任御託趣、法印頼

尊^并沙弥其阿弥陀仏、記之、奉納御殿者也。

嘉慶二年^{丁卯}二月三日

頼尊在判
其阿在判

同年九月廿三日御託宣^ニ、此両卷縁起、入箱匣深

秘藏、納神殿以後、不可出社内^一。但、三年

一度、十六所行幸時、祠官七日精進、捧之。

不開、可令見諸人。一見功德莫太、必可

至仏土^一。廿九日、一日、十六所置宝前。還御

時、又、可納宝殿也。永不可及披見者也。

依此御託宣、御行幸前七日、垢離

取、荒蔣臥、以錦裏、垂覆面、无

言持之、十六所御行也。此箱輩、必

可有御引導。及度々御託宣、忝

御方便乎^云。

礼文云。

高田密嚴亦安養 成沢神仏一池水

蓮華即是法身体 華開見仏弥陀願

此前後八句礼文、御託宣文也^云。

私云。予^嘗信、雲州富田特留山信樂寺建立之

功終後、慶長四年七月比^{ヨリ}、渡海隱州、勸

化国中時、同国内島後都万院云在所、

名高田大明神^ニ靈験无双在神。彼御宝殿

内、不明箱、此二卷在之。一度納以來、終

不開書。羊僧、不思議依靈夢、神主

等許之、令見。愚僧^嘗信、終写^ニ取之^一、国

中人民勸化之畢。

慶長四年九月十三日 楽蓮信譽（花押）

神祇帳所計、羊僧直筆也。

重依靈夢告、高田御宝殿奉納之。

元和元年十月日 楽蓮社信譽（花押）

〔裏書〕

上卷

裏書①

加持事。即身義云。加持者表如来大悲^ニ与衆生信心^一。

仏日影現衆生心水曰^レ加、行者心水能感仏日^一名^レ持^文。

裏書②

鉄塔事。理趣經開題云。分流十万頌。本者龍猛菩薩

排南天鉄塔^一、親遇^ニ金剛薩埵^一、伝^ニ三密道^一

*、承五智灌頂、伝持秘密藏、誦出惣持金剛一乘深教亦十万偈。

裏書③

慶長十六年二月十三日、彼岸入、此上巻始。同十九日、日中七日別時回向時、別而夢想告ヨリ、此書披見沙汰スル故歟、天ヨリ一雲出来、天地頓震動、雷電々々光、聴衆消肝計ナリシ間、後日顕露之沙汰、可愼者也。神慮秘藏ニ思召故ヤラント思故、書付也。

信譽五十二才

答請人隱岐国住人急念道衛

裏書④

遠覚背衆事。南都興福寺遠覚ト云、殊勝ノ学者アリ。貧シテ寺家ノ交衆難レ叶、離山。尾張国下、熱田ニ参社頭籠ル。其夜、夢奉レ見明神ヲ。奉レ始、諸神達集玉テ、遠覚ヲナシ給。良有白帳装束着タル、貴ケナル神、諸神御供ニテ影向有。諸神畏達拝シ在ス。遠覚、心ニ是春日大明神ニテ在覚。其時、明神言、此遠覚、我等一大事客人也。貧道ニヨリ道心ヲヲコサセ、此度成仏セシメント思所、纔ニ世間采用ヲ与給、不可レ然、大怒在ト見、夢覚ニケリ。去レハ、我貧ハ忝モ仏果菩提為レ令レ至、明神御慈悲也思、臆、奈良登、渴死給ケリ。明神、手自春日山妻木拾、茶毘シテ、石ニテ十王切立テ置給ヘリ。今、其所ニ、大明神、日々御影向成也云々。和光御慈悲利益門御方便、皆以涅槃也。又、新羅寺家回祿喜者、昔蘭城寺為山門ニ焼払。或

僧、新羅大明神前通夜。夢中、明神玉簾

ヲカ、ケ披ケニ見玉フ。僧曰。寺家、悉焼失。何依テ笑在。明神答言。財宝在堂塔ハ、再建立ス。

今度、此焼失ニ依、寺僧中一人道心発、浮世ヲ

厭、浄土欣。依之、喜也。云。和光濟度利益忝御

方便也。加様ニ、世間ヨリミル則シハ、逆ナルヲスラ喜給フ。

何況、順ナル利益乎云々。

私云。伊勢之事。先大意云ハ、内外宮者、日本衆生之

父母御墓所定給、御内証也。五輪形事、能々可思之。

深生死二法ヲ忌、上妙精進詣悦玉フ。是孝行極致也。

雲州大社事、箱隠口伝是也。彼礼文云。大社弥陀

極樂界、結縁衆生成仏道、中宮六会地藏尊、今

世後世能引道、若宮菩薩觀世音、来迎引撰无有棄

彼。社頭御供参口伝、神無月口伝ナト、テ

重々ノコト、不可筆記。可聞口伝。

二尊並坐事。惣御殿柱九本アリ。是浄土ノ九品

表スル也。内陣垂木四十八本、表四十八願。其内大

日弥陀同坐シ給也云々

裏書⑤

本云。七反帰俗雄俊事。諸上善人集云。詩。戒徳全虧念

不退、閻王曾判入泥梨、頓知仏力難思議、大

火坑成ニ白藕池。雄俊城都人。善講説ヲ、無戒行。

所得施利用レト之非法ナリ。又、曾還俗入軍營中、逃難

再復再僧相。大暦年間、忽死シテ、見閻羅王、判シテ

入地獄。俊、高声曰。雄俊入地獄。三世諸仏、即、成

妄語。觀經云。下品下生者、造ニ五逆罪。臨終十念、尚得

往生。俊、雖造レ罪、不造五逆。況、平日念仏罔知其

數^フ。言已再甦。俄頃^{アテ}加趺乘花台^文西往^文。

又云。善和屠牛業等者、張善和、世業屠牛、報豈輕。臨終十念為傾誠、慈尊応現諸冤

積、不涉冥途^一即往生。張善和者、殺^レ牛為^レ業。命

終之時、見^下牛數頭、作人言^一曰、汝殺^レ我^上。善和怕怖。

告其妻^一曰。急請^レ僧來樣我、僧至為言。十

六觀經云。若人臨終地獄相現^{セハ}、十称南^〇仏即得

往^二生淨土^一。善和云。便入地獄、不暇取香炉^一、以手

擎^レ香、面西念仏、未滿十声^一。為之我見^二阿

弥陀仏、從^レ西來迎^一我^一。言已而亡^{去イ}。

畢竟下三品、火車自然去、花台即來迎也^文。

慈恩伝云。魚鳥易^レ性飛沈失路^文。或時、孔子船乘行給。魚

浮タルヲ鵬々鳥見^テ、取思下時、孔子、船ハタヲ打時、魚ハ驚

沈、鳥驚飛上^{云々}。只今始是台。卒善惡異性、

一声称名、端的驚大事自然去消、花台即來迎。聖

衆立地來玉フ、只一声内也^{云々}。

下 卷

裏書①

七種生死事。翻訳名義集六云。

撰大乘明七種生死、一、分段生死謂三界果報

二、流來謂有識之初

三、反出謂背妄之始

四、方便謂入滅二乘

五、因縁謂初地已上

六、有後謂第十地

七、無後謂金剛心

裏書②

頼尊云、千金莫伝ノ雖^一深秘^{ナリト}、不殘^二心底^一。奉納^二御殿^一。

一、口伝云。一、御殿事。是^{レハ}、五輪形造。然^ヲ以^二本覺智^一、無

言甲斐^一、始覺智^ヲ為^レ忌、深忌。依之、五輪形造

人易知故、深秘造形縁高、地輪也。神所居御内

水輪也。葺所火輪也。萱^ヲモテ葺^{タル}意^ハ、八万諸煩惱大日

智火所在燒意也。故、護摩法門。太刀樣^{ナル}智義^ハ、

風輪也。只、外宮切崎下^{ヘテ}向切^{ナリ}。是、表男。内宮^ハ

切崎仰切^{ナリ}。是、女体也。鯉木、切口^{ヨリ}見、円形^{ナリ}。

旁^{ヨリ}見^モ円形。是、空輪也^{云々}。是甚深口伝也。

一、又口伝云。御心柱云^ハ、是独古也。万法精^{ナリ}。是云神心^一。一丈

三千界心表。故、我等死^{スル}時^モ、此処還^リ、生時、此処^{ヨリ}生。故、

心柱^ト云也。真如理性^ハ、約衆生^二時^ハ、心也。此心、太神々意也。

神意、即、心御柱也。故、大神心以表顯教^一、色法以

表^二真言^一之^{云々}。是、甚深口伝。

一、口伝云。内裏^二間觀音^一、七寸^ニ造顯。是、大神宮御神

体也。兩社、惣慈悲也。左右六寸、梵天帝尺造

給。如先、兩社御本地也。但、東大寺^ハ、聖武天王、天

照大神化身^{トシテ}、三尊造給。釈迦^ハ、太神^ノ天竺^ニ出給

顯、密教主也。左、觀音^ハ、内宮御本地、胎大日、右

虚空藏、外宮本地、金大日故^{ナリ}。又、觀音座

下、立板^ノ正面^ノ間^{ニハ}、帝尺^ヲ造^{アリ}。可見之。虚空藏

下、梵天作^レ可見。兩社梵天帝宮、写之^{云々}。口伝^{甚深}。

一、春日社中、有五輪^一。言伝伊勢五輪。可思^合之^{云々}。

一、於社壇、振鈴、有口伝^{ナリ}。是、甚深口伝也。

一、口伝云。日本、是、大日本国也^{云々}。

一、口伝云。日本、是、弥陀本国也^{云々}。無神月

云事、是、神道深意也。

一、口伝云。両社造五輪形。天照大神者、我身是也。八百万神者、八万四千煩惱、是也。内宮トハ入息、外宮トハ出息、是也云々。我大師空海ヨリ代々相承、神道極秘書記シテ、奉納御殿内。後日、時起到来、拝見人有レ之、於裏書所、別シテ可有心。全、不可及他見者也。此口伝、全、愚非拙口者也。皆々口授也云々。伝灯沙門頼尊判
嘉慶二年二月三日

裏書③

私云、一宗雖レ非スト相伝ノ趣ニハ、羊僧信譽、依明神御夢想ノ告ニ、感ニ得之ヲ間、秘藏スル迄也。依作者時守ト真言トナルニ、信行ノ相違少ハ見ヘ侍レトモ、後御ランノ人々、其御心得尤候。无始元来往生ナト、候。西山ノ俱時、同時、正覚ニ似者歟。此内、有能、有頼、熊獸血塗尋云コトアリ。是レハ越中国立山権現御出世由来ト聞為以間、其所ノ人ニ尋、可レ知レ之。

但、彼ノ其ノ阿弥陀仏ト者、尋レハ其本地、鎮西末流ト見タリ。其故云、何ナレハ、彼人脈血奉レテ納御宝殿ニ。見レハ之、定恵上人ノ御弟子聖円、良海上人ト云人ニ伝レテ法ヲ、有ニ上洛ニ後、帰ニ入シ四条金蓮寺ト云ヘル時守門下ニ、其名ヲ号ニ其阿弥陀仏ト。下ニ向隠州ニ事ヘ、次郎左衛門広有誘引セラレテ下ニ見タリ。其ノ古ヘノ名ヲハ、血脈ニ良保ト書タリ。上ハ如常、源空、弁阿、

良忠、良曉、定恵、良海、良保ト書タリ。布薩伝法ト見タリト云々。

予信譽ニ

靈夢ニ告ニ言ク。慶長四年九月八日、明クレハ九日、白針装束ノ人、宝殿ニ出ニ玉ヒテ拝殿ニ、二卷ノ書ヲ持来リ、羊僧ニ信譽告ニ言ク、弘通シテ此卷物、勸ニ化セヨ一切衆生ニ言玉テ、令レ渡、又御殿ニ歸給フ所ヲ、予、夢ノ心地ニ御袖ニ取り付奉リテ、可レ給ニ我等ニ云ハハ、彼人答テ云ク、可レ置ニ宝殿ニ。汝、明日早朝ニ參詣シテ、可レ聞之ヲ、御殿内ニ入玉フト見、夢ハ覺ニケリ。三度。依之、明旦早詣、神主御殿ヨリ取出奉レ讀タリト云々。諸人驚耳目。彼ノ国人ニ可尋之。

校訂註

- 1 補入記号のみあり。
- 2 二字を擦り消し、「広有」と重ね書きする。
- 3 注記が施されているが、擦り消されて判読できず。
- 4 注記が施されているが、擦り消されて判読できず。
- 5 内方子息と名付て：紺表紙本では「内房子息を近付て」と記す。
- 6 擦り消して「闍提闍」と重ね書きする。紺表紙本の当該部分は「七種生死の姿」と記す。
- 7 紺表紙本は「さらに」と記す。
- 8 補入記号のみあり。本来は「無阿弥陀」の四字を補うところである。